

平安京右京九条一坊十五・十六町跡 (西寺跡)、唐橋遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一六―六

平安京右京九条一坊十五・十六町跡(西寺跡)、唐橋遺跡

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京九条一坊十五・十六町跡
(西寺跡)、唐橋遺跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、社屋新築工事に伴う平安京跡・西寺跡・唐橋遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

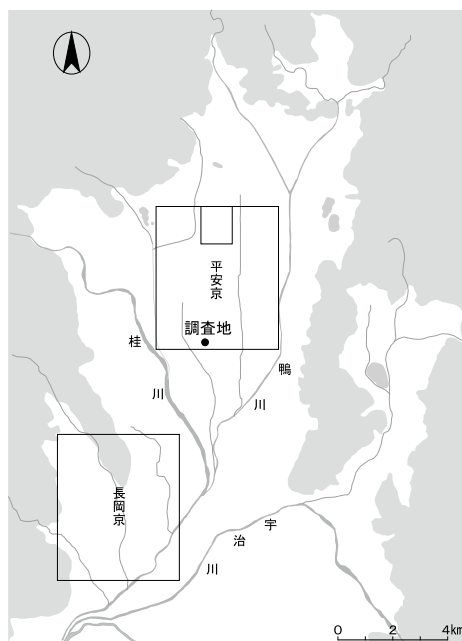
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・西寺跡・唐橋遺跡（文化財保護課番号16 H 190）
- 2 調査所在地 京都市南区唐橋門脇町17番地5
- 3 委 託 者 株式会社大妙 代表取締役 大井 忠
- 4 調査期間 2016年10月3日～2016年10月21日
- 5 調査面積 55㎡
- 6 調査担当者 近藤奈央
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「中河原」「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤奈央
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
- 15 協力者 弥生土器の整理に際して、國下多美樹氏（龍谷大学文学部教授）から御教示を頂いた。記して、感謝を申し上げます。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	9
(1) 遺構の概要	9
(2) 基本層序	9
(3) 弥生時代中期の遺構	9
(4) 平安時代前期から中期の遺構	9
4. 遺 物	13
(1) 遺物の概要	13
(2) 弥生時代前期から後期の遺物	13
1) 土器類	13
2) 石器・石製品	19
(3) 平安時代以降の遺物	21
1) 土器類	21
2) 漆器	23
3) 瓦類	23
4) 金属製品	24
5. ま と め	25
(1) 平安時代の様相	25
(2) 弥生時代の様相	27

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景〔弥生時代〕(北から)
		2	溝5全景(北東から)
図版2	遺構	1	調査区全景〔平安時代〕(北から)
		2	井戸1全景(南東から)
図版3	遺構	1	井戸1井筒検出状況(南東から)
		2	井戸1北西角近景(南東から)

- 3 井戸1北東角近景（南西から）
- 4 土坑3完掘状況（南西から）
- 図版4 遺物 弥生土器1
- 図版5 遺物 弥生土器2
- 図版6 遺物 1 弥生土器3
- 2 石器・石製品
- 図版7 遺物 石器、土器類、漆器、瓦類

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景（北東から）	2
図3	作業風景（北西から）	2
図4	調査区配置図（1：200）	2
図5	西寺跡関係発掘調査位置図（1：2,500）	4
図6	遺構実測図（1：80）	10
図7	溝5断面図（1：40）	11
図8	井戸1実測図（1：40）	11
図9	土坑3断面図（1：40）	12
図10	弥生時代土器実測図1（1：3）	14
図11	弥生時代土器実測図2（26～38は1：4、39～48は1：3）	16
図12	弥生時代土器実測図3（1：4）	18
図13	弥生時代の石器・石製品実測図（1：2、63のみ1：4）	20
図14	平安時代以降遺物実測図（1：4、78・82～84のみ1：2）	22
図15	遺構変遷図（1：100）	25

表 目 次

表1	西寺跡関係発掘調査一覧表	5
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	13

平安京右京九条一坊十五・十六町跡（西寺跡）、唐橋遺跡

1. 調査経過

調査地は平安京右京九条一坊十五・十六町跡（西寺跡）、唐橋遺跡にあたる。八町域を占めていたとされている西寺の境内地北半に位置し、針小路の路面部分に相当する。また、下層の唐橋遺跡は弥生時代から古墳時代の集落跡で、周辺では方形周溝墓や竪穴建物などが確認されている。

今回の調査は、京都市南区唐橋門脇町17番地5に所在する株式会社大妙社屋新築工事に伴うものである。調査に先立つ京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「保護課」という）の試掘調査によって、平安時代の遺物包含層や弥生時代から古墳時代の遺物包含層が確認された。不明な点の多い西寺北側の敷地についての知見が得られ、当該期の遺構の検出が見込まれることから、発掘調査の指導がなされ、株式会社大妙の委託を受けた当研究所が調査を担当することとなった。

調査区は保護課の指導により、調査地の東半に、東西5m、南北11mで設定した。調査面積は55㎡である。調査は2016年10月3日から付帯工事を開始し、翌4日に重機掘削を行った。図面作

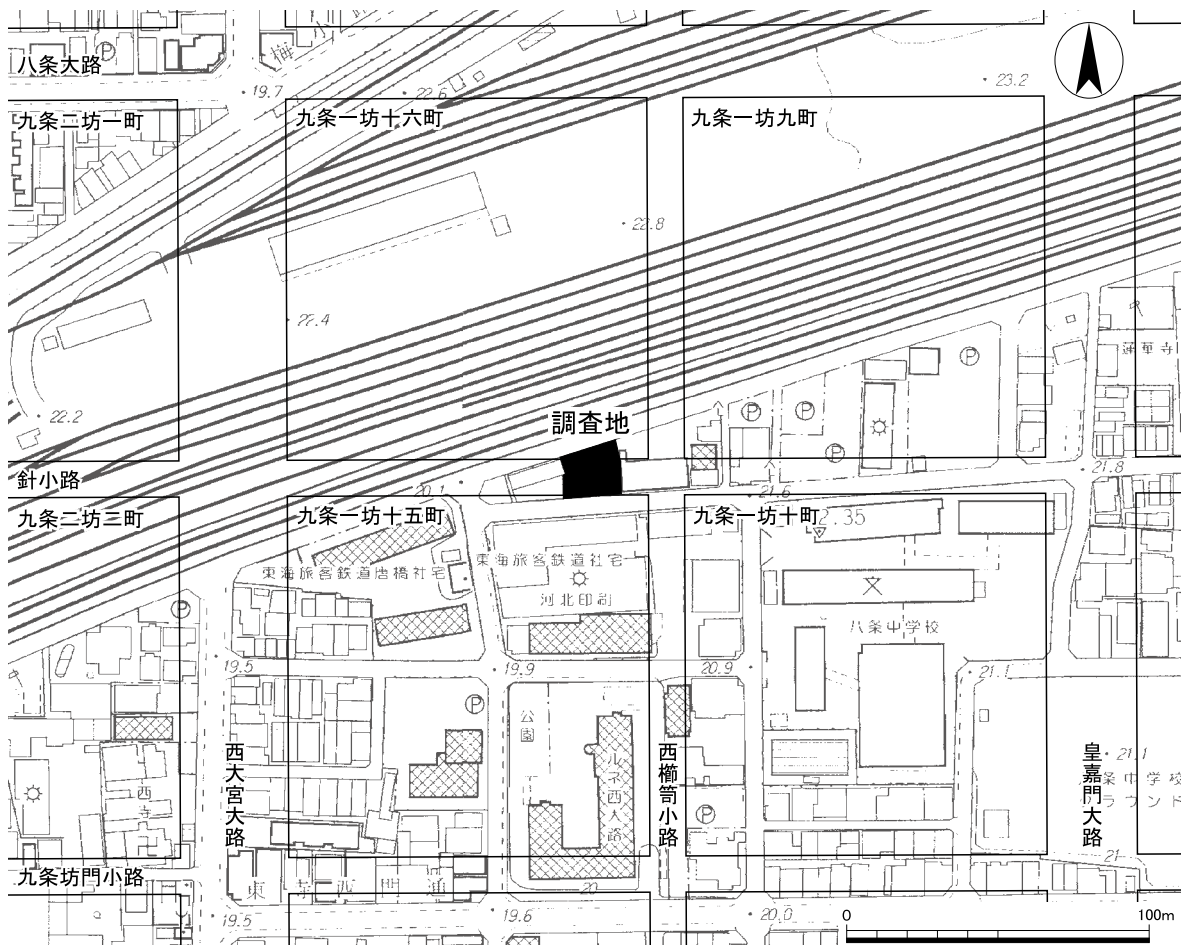


図1 調査位置図（1：2500）



図2 調査前全景（北東から）



図3 作業風景（北西から）

成及び写真撮影などの記録作業を行い、2016年10月21日に調査を終了した。なお、調査時の掘削限界深度は、本体工事との関係で予め決められていた。しかし、検出した井戸の深さがこれを超えることが明らかとなったため、保護課の指導の下、株式会社大妙の協力を得て、掘削可能な範囲について遺構の掘り下げを行った。

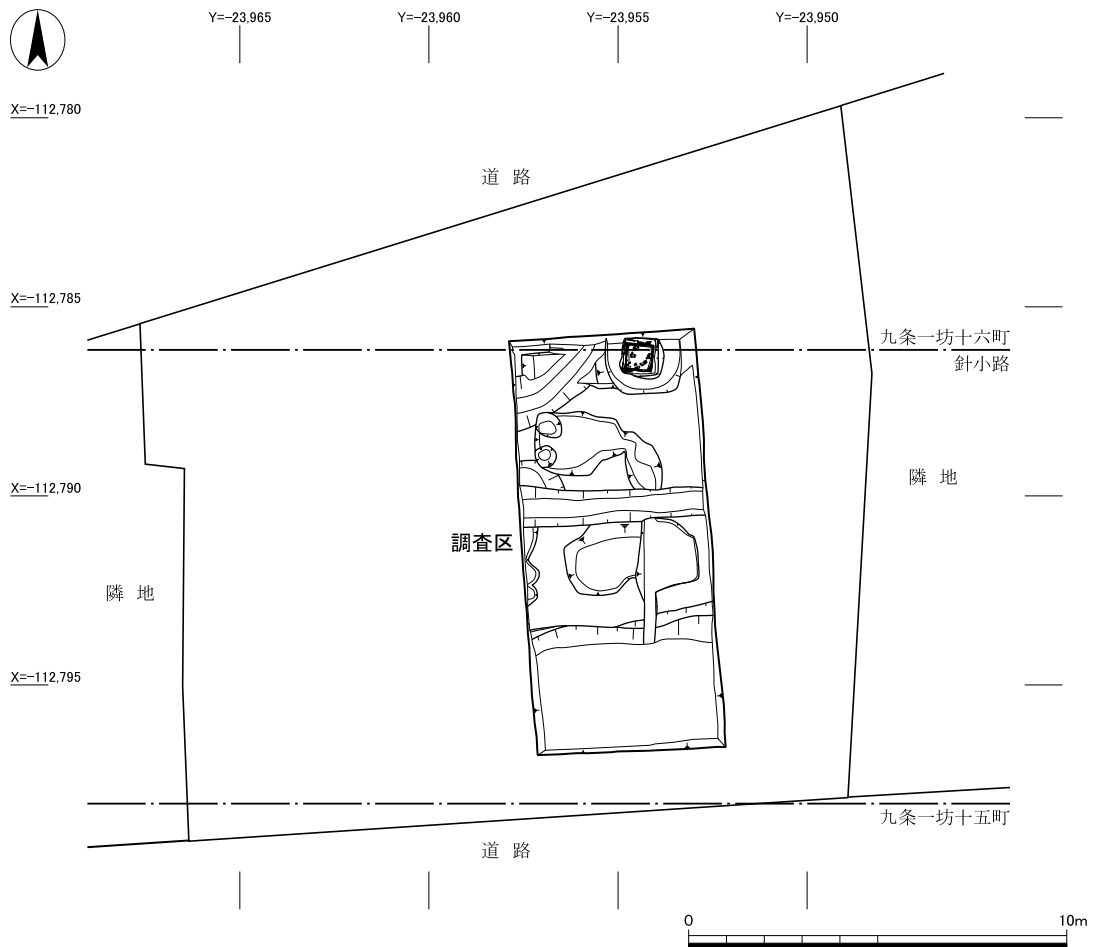


図4 調査区配置図（1：200）

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は京都盆地の北半に位置し、鴨川と桂川のほぼ中間地点、両河川合流地点から北へ約5.7 kmに立地する。基盤層は主に鴨川の堆積物であり、約6,000～4,000年前の温暖期に堆積したという塩小路層と称される砂礫で構成されている¹⁾。

西寺は、延暦13年(794)の平安京遷都時に、鎮護国家を祈願する官營の寺院として、羅城門近くの京内に東寺とともに建造された。南は九条大路、東は皇嘉門大路、西は西大宮大路、北は八条大路に接する、右京九条一坊九町から十六町の8町域を占地していたと考えられている。南側の4町域に金堂や講堂などの主要伽藍が建ち並び、北側4町域に寺院の維持や管理・運営を司る機関の関連施設があったとされている。平城京に造られた寺院の事例及び東寺旧境内に残る町名などから、西寺境内地北半には大衆院(九町)、政所院(十町)、倉垣院(十五町)、花園院(十六町)が想定されている²⁾。

西寺は官寺でありながら、創建やその後の歴史について不明瞭なところが多い。延暦15年(796)に藤原伊勢人が造寺長官に³⁾、延暦16年(797)に笠朝臣江人が造西寺次官に任命されていることから、遷都に伴って本格的に造営が開始されたと考えられている。延暦19年(800)には造営に必要な巨木の伐採が許可され⁵⁾、弘仁3年(812)には田地や建具類の施入が行われており⁶⁾、造営は遷都から15年以上経っても続いていたようである。天長9年(832)に西寺講堂で、新造仏の御願供養が営まれた⁷⁾。このことから、主要伽藍は天長年間には完成していたとみられる。また、塔については、元慶6年(882)に塔料が施入されており⁸⁾、東寺同様、その造立が遅延していたようである。延喜6年(906)に西寺別当となった聖寶によって、仏像の制作・安置が行われ⁹⁾、寺院としての整備が進められた。旧都平城京の薬師寺から、仏教の僧尼を管理する役所である僧綱所が西寺に移転され¹⁰⁾、また国忌を担う官寺として繁栄する。しかし、正暦元年(990)に塔を除く大部分が焼失し、その数か月後には西寺で行われていた国忌が再建の間、東寺に移管された。仁平元年(1151)には、「西寺荒廢」を理由に僧綱の儀式が東寺で行われるようになった¹²⁾。その後も再建と修理を繰り返して存続していたが、建久年間(1190～1199)に文覚により西寺の塔が修理されるものの、天福元年(1233)の塔焼失を最後に廃絶したとされる¹³⁾。

(2) 既往の調査(図5、表1)

西寺跡と推定された範囲内での調査は、すでに30次に及び、今回は31次調査となる¹⁴⁾。南側4町内では、主要伽藍に関わる遺構の検出例が多く、現在までに南大門、中門、金堂、東・西回廊、東・西・北僧房、東・西小子房、食堂及びそれらを囲んでいた四面の築地塀跡などが確認されている。基本的には、東寺の建物配置と対称をなすと考えられているが、経蔵や鐘楼、塔など確認されていない遺構も残されており、不明な点も多い。また、北大門に相当する遺構は現在のところ確認され

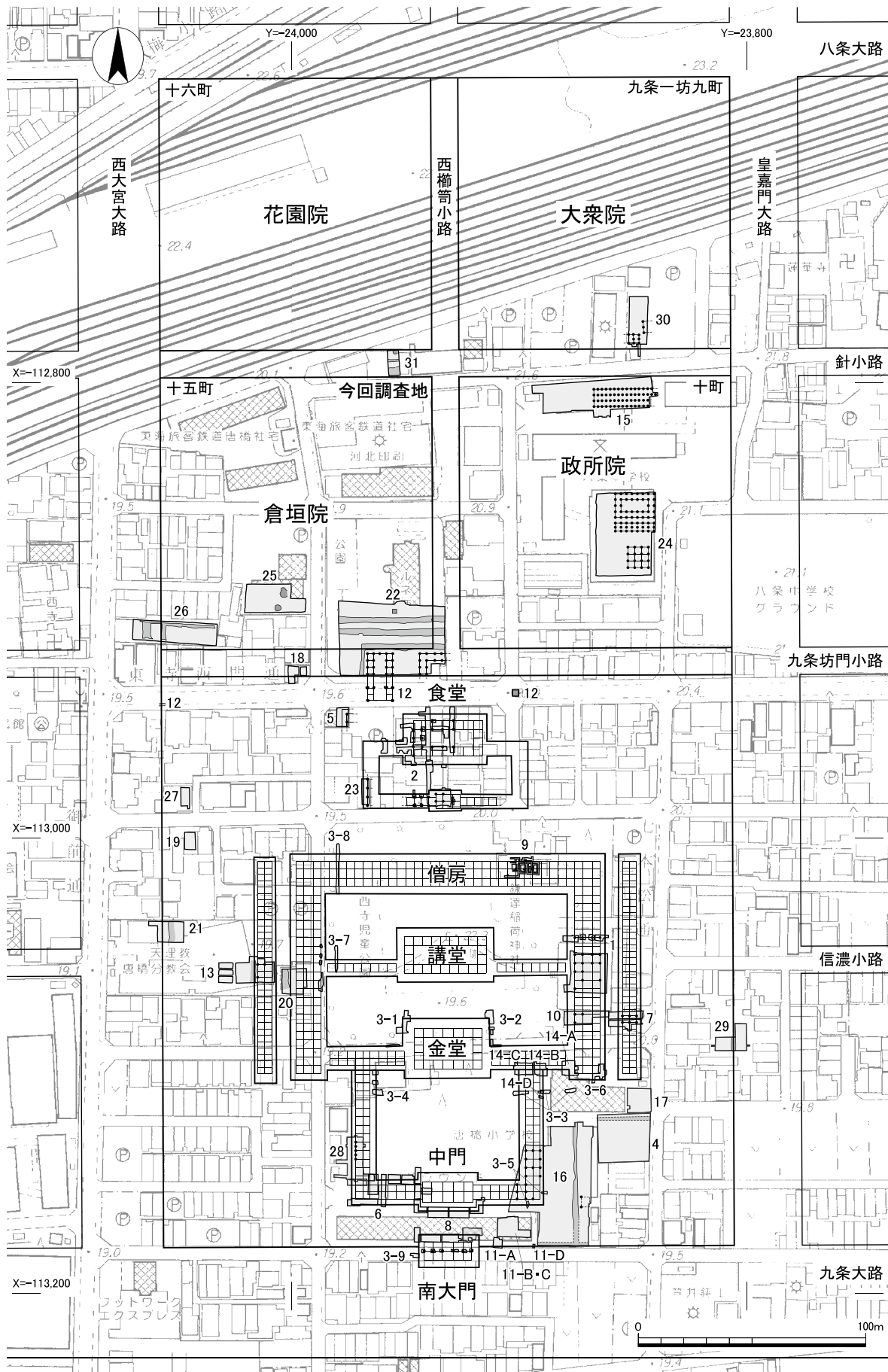


図5 西寺跡関係発掘調査位置図 (1 : 2,500)

表1 西寺跡関係発掘調査一覧表

調査 次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関	調査担当者	西寺跡関係遺構・遺物	西寺関係以外の 遺構・遺物	文献
1	東僧房	唐橋西寺町57 (西寺児童公園)	1960/06/18 ～06/26	奈文研	杉山信三	基壇、礎石採取穴、礎石	—	1・2・3
2	食堂院	唐橋西寺町	1962/02/19 ～03/12	奈文研	杉山信三	食堂と南門の礎石採取穴、回廊 礎石・礎石採取穴	鎌倉以降の井戸	1・2・3
3	金堂・南大門・ 東西僧房	唐橋西寺町57ほか(西寺 児童公園・唐橋小学校・ 周辺道路)	1962/09月 ～12月	奈文研	杉山信三	金堂基壇延石・地覆石、南大門 礎石採取穴、東僧房雨落溝・礎 石採取穴・基壇、西僧房礎石採 取穴、北僧房礎石採取穴、東回 廊延石・延石採取穴、西回廊地 覆石・地覆石採取穴、南回廊延 石、金堂軒廊延石・地覆石、講 堂軒廊礎石採取穴	—	1・2・4
4	国忌堂(御霊堂)	唐橋西寺町65 (唐橋小学校内プール)	1970/07/14 ～08/08	市教委・ 平博	伊藤玄三	東西方向の築地遺構・大溝	古墳中～後期の土器	1
5	大炊殿	唐橋西寺町40	1972/11月 ～12月	市保護課・ 鳥羽研	峰 巍・ 浪貝 毅	礎石採取穴	古墳中～後期の土器	1・5
6	中門・西回廊	唐橋西寺町65(唐橋小学 校内グラウンド)	1973/07/25 ～08/20	市教委・ 鳥羽研	杉山信三	中門西縁基壇、西回廊雨落溝・ 暗渠	—	1
7	東小子房	唐橋西寺町64	1973/09/20 ～10/10	市保護課	浪貝 毅・ 玉村登志夫	東雨落溝、礎石採取穴	—	1・6
8	中門・東回廊・ 南大門	唐橋西寺町65(唐橋小学 校内グラウンド)	1974/05/03 ～06/15	市教委・ 鳥羽研	杉山信三	中門延石・階段、東回廊延石	—	1
9	北僧房	唐橋西寺町57-1・2 (鎌達稲荷神社)	1974/06/25 ～07月	市保護課	梶川敏夫	礎石採取穴	—	1・7
10	東僧房	唐橋西寺町57(西寺児童 公園内ちびっこプール)	1977/05/16 ～06/04	京埋文	長宗繁一・ 吉川義彦	基壇西辺、礎石採取穴、西雨落 溝	—	8a・9a
11	南限築地	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1977/08/01 ～08/23	京埋文	本 弥八郎	柱穴、溝状遺構、築地基底部	—	9b
12	大炊殿・井戸	唐橋西寺町86	1978/01/10 ～01/27	京埋文	鈴木広司・ 長宗繁一	西限築地の凝灰岩暗渠、井籠組 井戸、食堂関係建物礎石採取穴	—	8b・9c
13	西小子房	唐橋西寺町27 (天理教唐橋分教会)	1977/11/07 ～11/30	京埋文	鈴木広司	基壇、礎石採取穴、西雨落溝	—	9d
14	東僧房・東回廊・ 金堂東軒廊	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1978/08/24 ～08/31	京埋文	百瀬正恒	東僧房礎石採取穴・雨落溝、東 回廊礎石、東軒廊基壇・延石	—	10・11b
15	西寺子院	唐橋門脇町35 (八条中学校)	1978/11/21 ～1979/03/06	京埋文	平方幸雄	南北三間、東西十五間以上の掘 立柱建物、輪羽口出土	弥生中期の大溝・溝・ 土坑、室町の建物・井 戸	11a
16	東回廊・国忌堂(御 霊堂)西築地・門跡	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979/01/27 ～03/31	京埋文	堀内明博・ 本 弥八郎	東回廊基壇・礎石採取穴・延石 ・地覆石・羽目石、築地基底部 ・西雨落溝、門跡礎石・礎石採 取穴、南築地内溝	古墳中期の落込状遺構	11c
17	境内	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979/06/01 ～06/21	京埋文	磯部 勝・ 辻 純一	土坑、瓦溜り	—	12
18	境内	唐橋門脇町2	1980/05/16 ～05/25	京埋文	鈴木広司	井戸、土坑	古墳中期の溝	13a・14a
19	境内	唐橋西寺町33-3	1980/06/23 ～07/07	京埋文	堀内明博	土坑、集石	古墳前期の流路	13b・14b
20	西僧房	唐橋西寺町30 (天理教唐橋分教会)	1980/08/01 ～08/13	京埋文	長宗繁一	基壇、溝状落込、柱穴	古墳の流路	13c・14c
21	西限築地	唐橋西寺町30 (天理教唐橋分教会)	1981/02/03 ～02/20	京埋文	平尾政幸	築地状遺構、溝状遺構(内溝?)	—	13d・14d
22	北限築地・綱所	唐橋門脇町29・30・31・ 44の一部	1986/06/02 ～10/06	京埋文	鈴木久男・ 磯部 勝・ 堀内明博	礎石建物、築地跡、溝、塀跡、 井戸、土坑	古墳の堅穴建物、中世 以降の溝・井戸	16a
23	食堂院	唐橋西寺町55-2	1986/11/05 ～11/19	京埋文	堀内明博	西回廊基壇、礎石採取穴、西雨 落溝、土坑、鉄滓・埴埴出土	奈良前期の流路、鎌倉 ～室町の溝	15・16b
24	西寺子院	唐橋門脇町35 (八条中学校)	1988/09/08 ～12/28	京埋文	菅田 薫	掘立柱建物、礎石建物	弥生の溝、古墳の焼土 ・流路、飛鳥の土坑、 鎌倉の井戸	17a
25	西寺子院	唐橋門脇町6・7	1989/01/17 ～03/15	京埋文	菅田 薫	柱穴、溝、土坑、井戸、輪羽口 ・鉄滓出土	弥生～古墳の土器	17b
26	西限築地	唐橋門脇町4-1	1990/11/08 ～12/20	関文会	吉川義彦・ 鎌田博子	築地基底部、東側溝、内溝、東 西溝	古墳の土器、江戸の井 戸	未報告
27	西限築地	唐橋西寺町35-12	2007/02/16 ～03/02	京埋文	能芝妙子	湿地状落込、土坑、柱穴	古墳の土器	18
28	西回廊	唐橋西寺町69 (唐橋小学校)	2007/07/23 ～08/20	京埋文	柏田有香	柱穴列、東西溝、西回廊基壇整 地土	—	19
29	東限築地	唐橋花園町9-8、9-9、 9-11	2013/11/18 ～12/10	京埋文	東 洋一	築地基底部、西側溝、内溝	弥生～古墳の流路	20
30	西寺子院	唐橋門脇町23-14	2016/05/09 ～06/17	京埋文	李 銀眞	掘立柱建物、柱穴列	弥生中期の方形周溝墓 ・土坑、古墳後期の土 坑	21
31	西寺子院	唐橋門脇町17-5	2016/10/03 ～10/21	京埋文	近藤奈央	井戸、溝、土坑	弥生中期の溝・落込み	本報告

※調査機関：「京埋文」は財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、「奈文研」は奈良国立文化財研究所、「市教委」は京都市教育委員会、「平博」は平安博物館、「市保護課」は京都市文化観光局文化財保護課、「鳥羽研」は鳥羽離宮跡調査研究所、「関文会」は関西文化財調査会を指す。

ておらず、西寺食堂院北側の空閑地で検出された綱所に関係するとされている2棟の建物についても、現段階で東寺境内では確認されていないといった相違点があることも知られつつある。

北築地塀（中仕切塀）より北側の敷地では、掘立柱建物や井戸などが確認されている。15次調査では、南北3間×東西15間以上の東西棟の掘立柱建物が確認された。総柱の建物とみられるが、北側柱穴列の掘形及び柱穴痕が南側3列よりも小さく、南から2列目の柱穴掘形が小振りであることから、北面に1間分の庇が付く板張りの建物と考えられている。24次調査では、南北2間×東西5間に四面に庇が付く東西棟の建物、南北2間×東西7間の東西棟建物、3間×3間の礎石建物が検出された。いずれも9世紀末には廃絶していたと考えられている。30次調査では、掘立柱建物2棟と南北方向の柱穴列を確認した。南北2間×東西2間以上の東西棟、南北2間×東西1間以上の東西棟が想定されている。柱穴列は針小路推定地を縦断して検出されており、また側溝や内溝の痕跡は確認されなかった。これらのことから、『延喜式』¹⁵⁾に規定された針小路は、西寺境内では施工されていなかった可能性が指摘された。22・26次調査では、境内の南北を限っていた築地跡とそれに伴う東西方向の溝が確認されている。また、22次調査では井戸2基が検出され、1基は築地の雨落溝内で確認した。もう1基は造り替えられていたことがわかった。時期はいずれも平安時代前期である。22次調査の遺構については、11～12世紀には廃絶していたと考えられている。25次調査は井戸1基が確認された。その他に、灰や炭を多量に含む土坑が検出されており、鉄滓や輪の羽口片が出土した。周辺で建物跡は確認されておらず、土坑は炉そのものではないが、近くに金属製品の工房があった可能性が高く、修理所に相当する施設の占有区域であったと推定されている。

下層の唐橋遺跡に関連した遺構や遺物は、4・5・15・18・22・24～27・28～30次で確認されている。西寺境内南側では、弥生時代から古墳時代の遺物を包含する流路やその堆積層が検出された。今回検出した遺構の時期である弥生時代中期の遺構を検出した調査は、15・24・30次である。15次調査では、方形周溝墓の北東隅にあるとみられる溝、土坑、大溝を検出した。大溝は検出幅8m（南北）、検出長26m（東西）、残存深0.6mを測り、唐橋遺跡で確認された弥生時代の遺構の中では最も大きな規模を持つ。24次調査では、弥生時代の溝2条が検出され、方形周溝墓の可能性が示唆された。弥生時代中期の畿内第Ⅱ様式に相当する土器がその中心をなし、畿内第Ⅴ様式までの土器が少量出土した。石剣・石斧などの石器類も出土している。30次調査では、方形周溝墓2基及び土坑が検出された。いずれも北に向かって東へ振れる軸を持つ。方形周溝墓は、一辺11.8mと同9m以上を測る規模で、一部溝を共有したような状態であった。溝や土坑からは、弥生時代中期前半の畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の壺が出土した。弥生時代中期の墓域が広がっていた可能性が指摘されている。

註

- 1) 横山卓雄「第二章 京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 杉山信三「第五章 東寺と西寺」同上

- 3) 『帝王編年記』 卷十二
- 4) 『類聚国史』 卷百七 左右京職 延暦十五年四月四日条
- 5) 『類聚国史』 卷百八十 佛道部七 諸寺 延暦十九年四月九日条
- 6) 『日本後記』 卷第二十二 弘仁三年二月三日条
 『類聚国史』 卷百八十二 佛道部九 寺田物 弘仁三年十一月二十七日条
 『類聚国史』 卷百八十二 佛道部九 施入物 弘仁三年二月三日条
- 7) 『日本記略』 天長九年七月五日条
- 8) 『日本三代実録』 元慶六年六月二十六日条
- 9) 『続群書類従』 卷第二百十三 傳部廿四 聖寶僧正傳
 『醍醐寺縁起』 延喜六年
- 10) 『日本三大実録』 貞観六年二月十六日条
- 11) 『日本記略』 正暦元年二月二日条
 『山槐記』 治承二年正月七日条
- 12) 追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集』 第23・24号 2003年
- 13) 『明月記』 天福元年十二月二十五日条
 『百鍊抄』 天福元年十二月四（ママ）日条
- 14) 大正10年（1921）に「史跡西寺跡」として指定されて以来、様々な調査機関によって調査が行われた。その結果、調査次数が統一されずに調査が進み、また境内北側4町分は西寺の敷地とすることが保留され、さらに民間調査機関の未報告の調査などによって次数に混乱が見られたことは、30次調査の報告書に整理されている（表1の文献21）。ただし、立会調査や京都市保護課の行った試掘調査については、周辺調査一覧に網羅されているわけではないことを周知しておくべきであろう。なお、今回の調査地は西寺敷地北半部に当たり、主要伽藍に直接かわからないことから、前回の報告次数を踏襲した。今後、検討を要する。
- 15) 『延喜式』 卷第四十二

文献（表1 西寺跡関係発掘調査一覧表）

- 1 杉山信三『史跡 西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
- 2 杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1964年
- 3 杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1962』奈良国立文化財研究所 1962年
- 4 杉山信三「西寺跡第3次発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1963』奈良国立文化財研究所 1963年
- 5 杉山信三・井上満郎・木村捷三郎・浪貝 毅「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1972』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年
- 6 浪貝 毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡 西寺跡・鳥羽離宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1973 - II』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 7 梶川敏夫「史跡 西寺跡 - 北僧房跡発掘調査概要 -」『鳥羽離宮跡・史跡 西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1974 - IV』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 8 a 長宗繁一・鈴木久男「西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報 1977年』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年

- b 長宗繫一・鈴木久男「西寺井戸跡」同上
- 9 a 「平安京右京九条一坊、西寺跡1」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- b 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」同上
- c 「平安京右京九条一坊、西寺跡3」同上
- d 「平安京右京九条一坊、西寺跡4」同上
- 10 百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要』（『京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』）、京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 11 a 「平安京右京九条一坊十町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- b 「平安京右京九条一坊・西寺跡1」同上
- c 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」同上
- 12 「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 13 a 鈴木廣司「西寺跡発掘調査 第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- b 堀内明博「西寺跡発掘調査 第18次発掘調査」同上
- c 長宗繫一「西寺跡発掘調査 第19次発掘調査」同上
- d 平尾政幸「西寺跡発掘調査 第20次発掘調査」同上
- 14 a 「平安京右京九条一坊、西寺跡1」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- b 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」同上
- c 「平安京右京九条一坊、西寺跡3」同上
- d 「平安京右京九条一坊、西寺跡4」同上
- 15 堀内明博「西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 16 a 磯部 勝・鈴木久男・堀内明博「平安京右京九条一坊1」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- b 堀内明博「平安京右京九条一坊2」同上
- 17 a 菅田 薫「平安京右京九条一坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- b 菅田 薫「平安京右京九条一坊2」同上
- 18 能芝妙子「平安京西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 19 柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4』）財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 20 東 洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年
- 21 李 銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-4』）公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年

3. 遺 構

(1) 遺構の概要 (表2)

検出した遺構の時期は、弥生時代中期及び平安時代前期から中期である。弥生時代中期の遺構には溝、落込みがあり、平安時代前期から中期の遺構には井戸、溝、土坑がある。弥生時代の遺構は調査区北西、平安時代の遺構は調査区全体で検出した。

(2) 基本層序 (図6)

現地表面の標高は20.9～21.2mの比高差0.3mであり、北東から南西にかけて緩やかに下がる。

基本層序は、地表下0.2～0.4mまでが現代盛土、以下、近代の耕作土（1層、厚さ0.05m）、砂礫を主体とする基盤層である。弥生時代及び平安時代の遺構は、基盤層を切り込んでおり、1面2時期の調査を行った。遺構面の標高値は20.8～20.9mで、平坦である。

(3) 弥生時代中期の遺構 (図6、図版1)

溝5 (図7、図版1) 調査区北西部で検出した。北東から南西方向の溝である。検出長3.5m、幅約1.3m、深さ0.6mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色や暗褐色の細砂や微砂礫である。緩やかに曲がっていることから、方形周溝墓の南東角に相当する溝の可能性もある。櫛描波状文などの文様を持つ壺や甕などの土器片が出土した。時期は弥生時代中期である。

落込み4 調査区北半の西壁際で検出した。検出長1m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物は土器細片であるが、時期は弥生時代中期とみられる。

(4) 平安時代前期から中期の遺構 (図6、図版2)

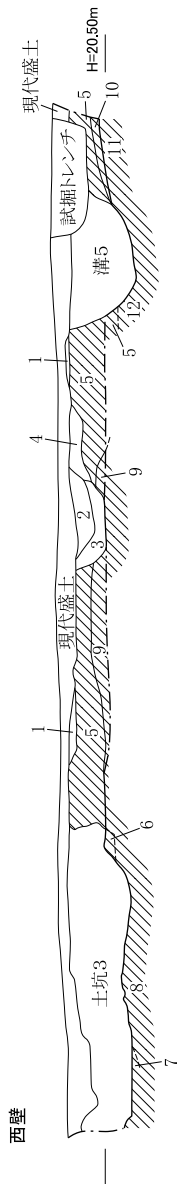
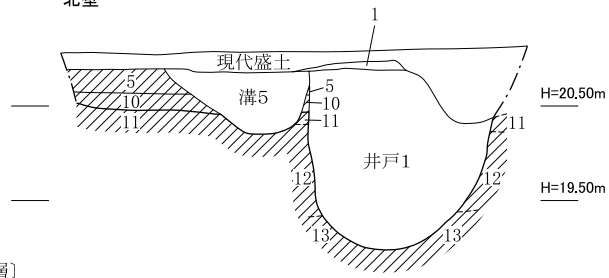
井戸1 (図8、図版2・3) 調査区北東部で検出した。井戸枠の内法が一辺0.85mの方形縦板横棧組の井戸である。残存深約1.8m、掘形は不正形な隅丸方形を呈し、一辺約2mを測る。縦板は幅15～20cm、厚さ約2.5cm、残存長は20～30cmであった。横棧は幅約8cm、厚さ約2cm、残存長約20cmで部分的にしか遺存しておらず、全長は不明である。底面に据えられた横板は、高さ約10cm、厚さ約2cm、長さ約74cm、両端を凹凸に加工し、四角く組み合わせていた。井戸枠よりも

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代中期	溝5、落込み4	
平安時代前期～中期	井戸1、溝2、土坑3	土坑3の出土遺物は弥生時代前期から中期

- 1 5Y4/2灰オリーブ色砂質土 シルト質〔近代:耕作土〕
- 2 10YR4/4褐色砂質土
径1~5cmの礫少量含
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
混礫(径1~10cm) [平安時代:溝2]
- 4 10YR3/2黒褐色砂質土
径1~3cmの礫含 [弥生時代:落込み4]
- 5 10YR4/2黒褐色微砂礫(径1~5cm)
- 6 2.5Y6/4にぶい黄色微砂
- 7 10YR4/6褐色シルト混10YR7/1灰白色微砂
- 8 2.5Y6/3にぶい黄色粘質土混粗砂~細砂礫
(径0.5~2cm)
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土混細砂礫
(径1~5cm) [基盤層]
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色微砂
- 11 7.5YR2/2黒褐色微砂礫(径0.5~2cm)
- 12 10YR2/2黒褐色細砂礫(径2~10cm)
- 13 2.5Y8/4淡黄色微砂~細砂礫(径5~20cm)

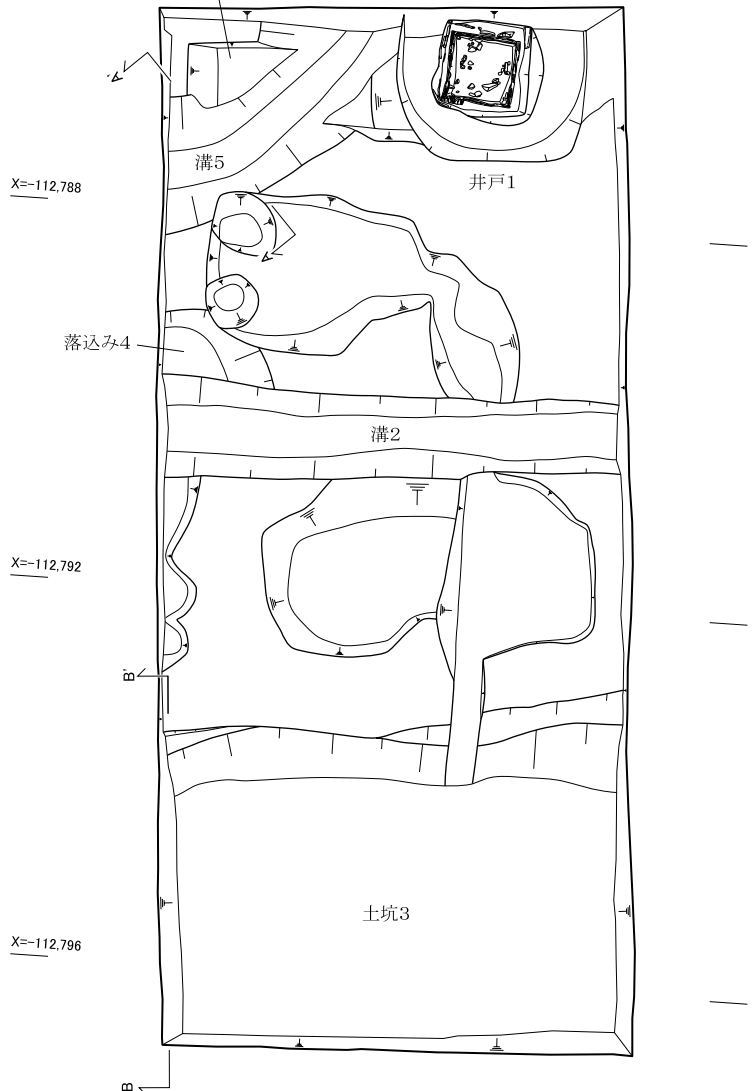
北壁



平成28年度
京都市保護課
試掘トレンチ

Y=-23.956

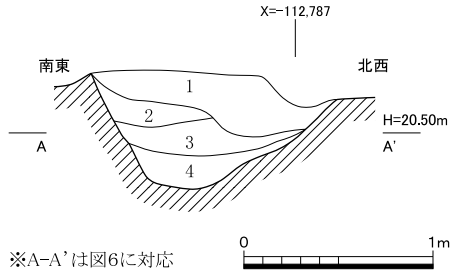
Y=-23.954



※A-A'は図7、B-B'は図9に対応



図6 遺構実測図 (1:80)



※A-A'は図6に対応

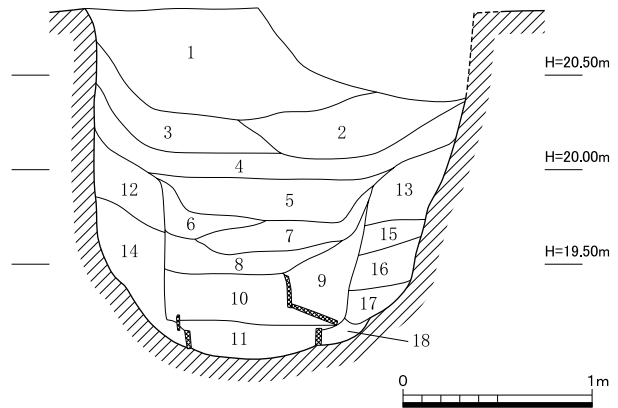
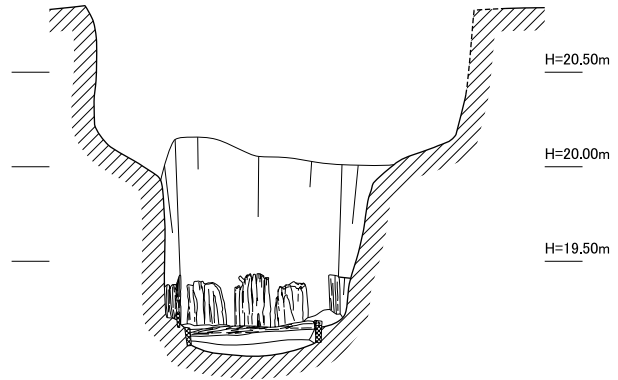
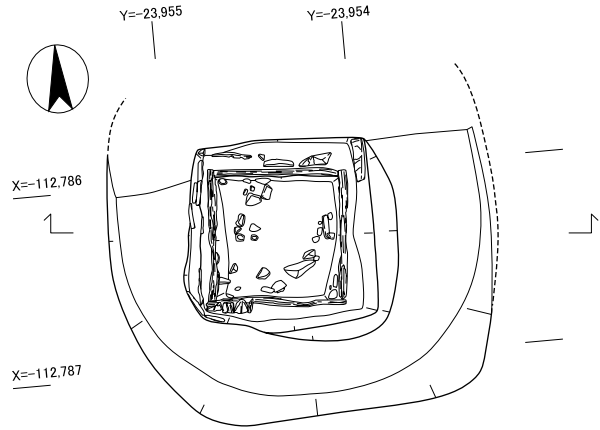
- 1 10YR3/2黒褐色砂質土混礫(径0.5~5cm)
- 2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色微砂礫(径0.5~2cm)
- 3 10YR4/4褐色細砂 径1~2cmの礫少量含
- 4 10YR3/3暗褐色微砂 やや粘質、径0.5~2cmの礫少量含

図7 溝5断面図(1:40)

内法一辺0.65mと一回り小さい方形の木枠であることから、水溜と考えられる。材質はいずれもスギ材であった。

掘形埋土は褐色細砂礫などである。埋土は褐灰色粗砂礫などで、最下層には湧水時に巻き上げられて堆積したとみられる黒褐色微砂及び細砂層を確認した。また、廃絶時に木枠が倒れた痕跡が認められたが、埋土中には破損した井戸材が確認できなかったことから、その大半が廃絶時に抜き取られたとみられる。掘形埋土から土師器細片や緑釉軒丸瓦など、井戸埋土から土師器や須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦、鉄釘、漆器などが出土した。遺物の出土状況から、この井戸は平安時代前期に築造され、中期に廃絶したとみられる。

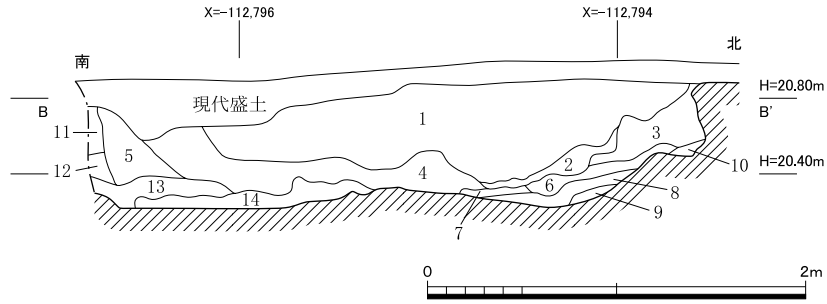
溝2 調査区中央北寄りで検出した。残存幅0.8~1.1m、深さ0.2~0.4m、検出長4.8mの東西方向の溝である。勾配は西へ緩やかに下がる。埋土は褐色砂質土などで、流水痕跡は認められなかった。出土遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦などである。時期は平安時代前期から中期とみられる。



- 1 10YR3/2黒褐色砂質土 径1~7cmの礫含
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 径1~15cmの礫多量含
- 3 10YR3/4暗褐色砂質土混粘質土 径1~3cmの礫・5Y4/1灰色砂質土ブロック少量含
- 4 7.5YR3/3暗褐色砂質土 やや粘質、径1~5cmの礫少量含
- 5 10YR3/2黒褐色粘質土混微砂 径1~8cmの礫多量含
- 6 2.5Y3/2黒褐色粘質土 径3~5cmの礫・細砂少量含
- 7 10YR2/2黒褐色砂質土 やや粘質、細砂混じり、径1~3cmの礫含
- 8 10YR4/2灰黄褐色粘質土混細砂礫(径1~3cm) [井戸枠内埋土]
- 9 2.5Y3/2黒褐色細砂礫(径1~5cm) やや粘質
[使用時または埋め戻し時の崩落土]
- 10 10YR4/1褐灰色粗砂礫(径1~5cm) [井戸枠内埋土]
- 11 2.5Y3/1黒褐色微砂~細砂 径1~5cmの礫少量含(水溜枠内埋土)
- 12 10YR4/4褐色細砂礫(径2~5cm)
- 13 2.5Y3/2暗オリーブ褐色細砂 径1~2cmの礫少量含
- 14 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂礫(径1~3cm)
- 15 10YR4/4褐色微砂 径1~5cmの礫少量含
- 16 5Y2/2オリーブ黒色細砂~粗砂礫(径1~10cm)
- 17 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂礫(径1~3cm)
- 18 2.5Y4/1黄灰色細砂礫(径1~3cm)

[掘形]

図8 井戸1実測図(1:40)



※B-B'は図6に対応

- 1 7.5YR3/2黒褐色粘質土 径0.5～3cmの礫多量含、土器含
- 2 10YR2/2黒褐色粘質土 径1～2cmの礫少量含
- 3 10YR2/2黒褐色粘土 径1～2cmの10YR1.7/1黒色粘土粒少量含
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭・径1cmの10YR6/4こぶい黄褐色粘質土ブロック・径1～10cmの礫少量含
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 径0.5～1cmの10YR4/6褐色シルトブロック・径0.5～3cmの礫少量含
- 6 10YR4/6褐色粘質土
- 7 10YR4/4褐色粘土
- 8 2.5Y2/1黒色粘土
- 9 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 径1～2cmの2.5Y2/1黒色粘質土ブロック含
- 10 2.5Y3/3オリーブ褐色粘質土 径0.5cmの2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック少量含
- 11 10YR4/3こぶい黄褐色粘質土 径0.5cmの炭・礫少量含
- 12 10YR3/4暗褐色粘質土 細砂・径0.5cmの礫少量含
- 13 2.5Y7/4浅黄色微砂 径1～5cmの10YR6/1褐灰色粘土ブロック含、土器少量含
- 14 10YR4/1褐灰色粘質土混10YR7/4浅黄色微砂～細砂 炭・土器少量含

図9 土坑3断面図 (1 : 40)

土坑3 (図9、図版3) 調査区南端で検出した。東西5 m以上、南北3.7 m以上、深さ約0.7 mを測る。東西方向にはほぼ直線的な肩口を持ち、底面は基盤層であるシルトや微砂、細砂礫層で平坦になっていた。北肩口の一部に、精良な黄褐色土が遺存していた。埋土は弥生時代中期を主体とする遺物を多量に包含する黒褐色から褐色の粘質土及び粘土で、固く締まっていた。遺物は、弥生時代前期から後期初頭にかけての細片化した土器が混在しており、石庖丁などの使用痕のある石器類や未製品などが出土した。平安時代の遺物は出土していない。これらのことから、壁土などに使用するために土取りを行った後、周辺から運んできた土で埋め立てて、丁寧に整地した土坑と考えられる。この遺構からは弥生時代の遺物のみが出土したが、採土の痕跡としては大規模で、直線的な肩口を持つことによって条坊に影響されているとみられることから、平安時代前期の西寺造営時に関わる遺構と考えられる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表3)

遺物は、遺物整理箱に11箱出土した。内訳は、土器・瓦類10箱、石器類・木製品・金属製品1箱である。

弥生時代中期の遺物は、当該期の遺構から少量出土した。弥生時代の遺物の大半は、平安時代前期とみられる土坑3に伴って出土しており、前期から中期に相当する大量の土器類と、磨製石斧や石庖丁などの石器類を少量確認した。土坑3には、弥生時代後期の土器類も少量含まれる。この他、溝5や落込み4からも、弥生時代中期の遺物が出土している。

平安時代の遺物には、土師器や須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦類などがある。井戸1からは、土器類と共に緑釉軒丸瓦や漆器、鉄釘などが出土した。

その他、土坑3から碧玉製管玉の未成品が出土したことから、一部の埋土を篩にかけて水洗いした。その結果、サヌカイト剥片などの微細遺物とともに、魚骨を検出した。魚の種類及び骨の部位は不明であるが、被熱していたことが判明した。

なお、土師器の年代観については、京都土器編年を使用する¹⁾。

(2) 弥生時代前期から後期の遺物

掲載した遺物は、平安時代の遺構である土坑3から出土した。土器の時期は、弥生時代前期から後期の時期に収まり、中心となる時期は弥生時代中期の山城第Ⅱ～Ⅲ様式²⁾である。石器及び石製品は、石鏃、石斧、石庖丁、磨石、台石、管玉がある。

1) 土器類 (1～52、図10～12、図版4～6)

1～7は壺、8～11は甕である。1は大きく外反する口縁部で、口縁端部に刻目を施す。内外面

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代前期～後期	弥生土器、石器・石製品		弥生土器52点、石器・石製品11点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、漆器、瓦、金属製品		土師器6点、須恵器2点、緑釉陶器4点、灰釉陶器1点、漆器1点、軒丸瓦2点、軒平瓦1点、金属製品3点		
中世以降	瓦質土器		瓦質土器1点		
合計		13箱	84点(3箱)	0箱	10箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。



图10 弥生土器实测图1 (1 : 3)

はハケメである。外面はオサエによって部分的に窪む。2は頸部から大きく外反する口縁部である。口縁端部には、1条の沈線上に、斜線を交差させて「×」状にした刻目を施す。内外面はハケメで、特に外面の工具の櫛目が幅0.1cm以下と細かい。外面はさらにヘラ状工具によるナデやミガキが部分的に行われている。3は口縁部内面に、0.4cm幅の凹線を横方向に3条施文する。器形は頸部が外屈し、直線的に広がる。口縁端部外面をわずかに肥厚させる。外面はナデである。4は広口長頸壺の頸部破片とみられる。頸部に3条以上の突帯を貼り付け、布を巻いた棒状工具で突帯を押圧して施文する。内外面はナデである。5は頸部または肩部の破片である。1条以上の突帯を貼り付け、突帯を棒状工具で刻む。外面はミガキとみられる。6は肩部の破片とみられ、ヘラ描沈線を施す。沈線は7条分を確認できる。内面はナデ、外面はミガキである。7は頸部から体部の破片である。外面に2本1単位の複合櫛描文を4条施し、その間に2個1単位の竹管文を施文する。内外面はハケメである。8は直立する体部から、口縁部が外反する器形である。頸部外面に1条以上のヘラ描沈線を施文する。内面はハケメ、外面はナデである。9は口縁部が大きく外反し、口縁端部外面がやや肥厚する。口縁端部を棒状工具で押し引きながら刺突を行っているため、長さ0.5cmの破線状の文様となっている。外面下部に2条のヘラ描沈線が施されている。内外面はナデである。10は頸部から体部にかけての破片で、やや張った体部が頸部で窄まり、口縁部が外反する器形を呈するとみられる。外面に3条の沈線を施文する。11は緩やかに外反する頸部片である。肩部に多条化したヘラ描沈線を施す。沈線は5条以上である。内外面はナデにより成形する。以上の土器の色調は、にぶい橙色からにぶい黄橙色（7.5YR7/4～10YR6/4）の浅い色を呈するものが主体を成す。8のみ橙色（5YR6/6）を呈する。胎土は1～7が0.2cm以下の石英・チャートなどを含む精良な土、9は0.2cm以下の砂粒を含むやや粗い土である。1～11は山城第Ⅰ様式新段階で、弥生時代前期末に相当する。

12～16は壺の口縁部である。12は口縁部が外方しながら直線的に立ち上がり、口縁端部で大きく外反する器形である。口縁部は器厚がやや薄く、口縁端部に沈線がめぐる。内面はナデ、外面は縦方向のハケメである。13は大きく外反する。内面に刺突文が3個並列して施されている。口縁端部は横方向のハケメ、外面はハケメである。口縁部外面は工具の向きを変えているため、羽状文の様になっている。14は口縁端部近くの内面に、2列並行で列点文が施される。内面はナデ、外面はハケメのちナデである。15は外反する口縁部である。器壁が厚く、口縁端部が特に肥厚する。外面下部にハケメ痕が認められる。16は大きく外反する口縁部で、端部を下方へ摘まみ出す。内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のミガキである。口縁端部外面には強いナデが認められる。17は甕用の蓋の口縁部である。口縁端部は上下に拡張する。内面及び口縁端部はハケメ、外面はナデである。18～21は甕の口縁部である。18は口縁端部が上方に拡張する。口縁端部中央に沈線が認められる。内外面はナデである。19は口縁部が大きく外反する器形である。外面はナデ、内面はナデまたはハケメとみられる。二次的に被熱しているためか、にぶい赤橙色（10R6/4）を呈する。20は体部が直立し、頸部で「く」の字に開く。口縁端部に等間隔の刻目を施す。内面はハケメ、外面はナデで、端部近くを強くなでる。体部の器壁は口縁部よりも薄く、厚さ0.25cmである。21は口縁部

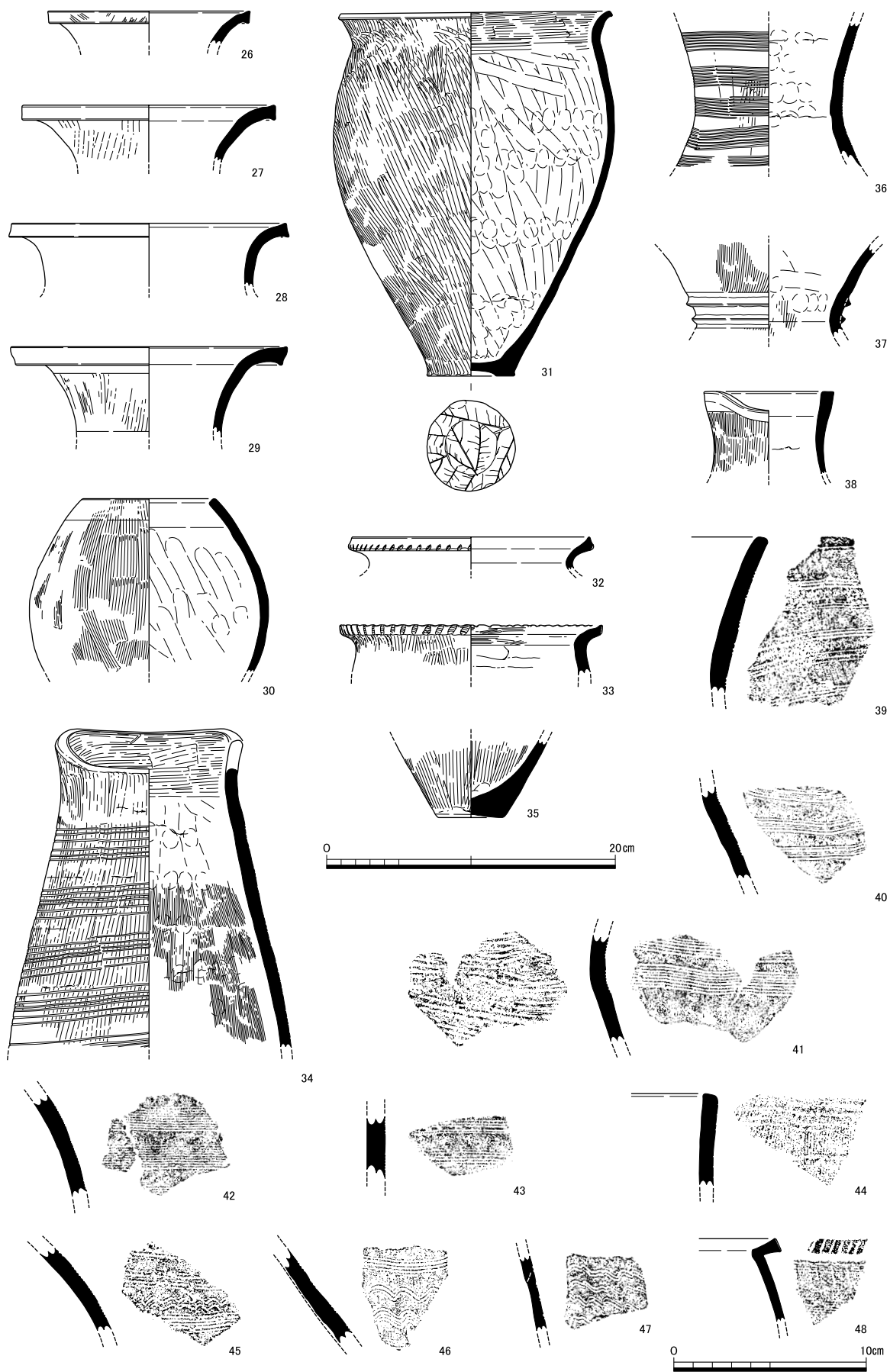


図11 弥生土器実測図2 (26~38は1:4、39~48は1:3)

が強く外反する。口縁部内外面に刺突文を施す。内外面及び口縁端部には、目の細かいハケメが認められる。22～24は近江系の甕の口縁部である。22は大きく外反し、口縁端部を上方へ立ち上げる。内面は波状文と横方向のハケメ、口縁部外面は横方向のハケメ、下部は縦方向のハケメである。頸部には沈線が認められる。23は口縁部が大きく外反し、口縁端部に刻目を配する。頸部に0.2～0.3cm幅の沈線がめぐる。内面はハケメ、外面には粘土接合痕による段差が認められ、その下では縦方向のハケメ、上では横方向のハケメである。24は口縁部が緩やかに外反する。口縁部内面は横方向のハケメ、内面下部は縦方向のハケメ、外面はハケメのうち口縁端部は横方向のナデである。口縁端部外面には、器面調整と同じ工具とみられる巻貝に似た押圧文が2個単位で施文されている。外面に煤が付着している。25は条痕文土器の壺の肩部片である。内面はナデ、外面は二枚貝によるケズリである。内面に明瞭な粘土紐接合痕が認められる。26～29は広口壺である。器形は頸部がやや直線状に外反し、口縁部で大きく外反する。口縁端部は上下に拡張する。内面から口縁端部外面にかけてはナデ、外面下部は縦方向のハケメである。26の口縁端部外面には櫛描波状文とみられる痕跡が残る。29の外面はミガキに近いナデ調整とみられる。30は球形を呈する無頸壺である。内面は下から上への強いナデ、外面は縦方向のハケメ、口縁部内外面は横方向のナデである。外面下部に粘土を輪積みした痕跡が残る。31～33は甕である。31はやや膨らんだ体部に、短く外反する口縁部が付く。口縁端部がやや肥厚する。底部は中央が窪む凹底で、全体に木の葉の圧痕が付着している。ただし、中央部と底部外周の葉脈の向きが異なっており、外周は後に付加したものと考えられる。内面下部は縦方向のナデとオサエ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメである。32は口縁部が強く外反し、口縁端部内面が上方へ拡張する。口縁端部外面下方に等間隔の刻目を入れる。内外面の調整は摩滅のため、不明瞭である。33は体部から口縁部が強く外反し、口縁端部が上方へ立ち上がる。口縁端部には刻目を入れる。内面は横方向のナデとハケメ、外面は縦方向のハケメである。34は撰津型の水差形土器である。体部は緩やかに内傾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁部の1箇所が片口状に作られている。内面下部はハケメ、内面上部はナデ、口縁部内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメ後、6本単位の櫛描直線文が5段にわたって施文されている。35は甕の底部である。底面はやや窪む。内外面はハケメ、底面はナデである。内面は使用のため摩滅しており、外面は煤が付着する。以上の土器の色調は灰褐色から褐色（7.5YR5/2～10YR4/4）が主体で、内面が灰白色（2.5Y8/1）のもの（13・34）や黒色系（10YR2/2など）のもの（23・35）が少量ある。胎土は0.2cm以下の砂粒を含む精良な土が多く、砂粒が多く粗い土の土器が数点含まれる（15・21・35）。時期は山城第Ⅱ様式で、弥生時代中期前半に相当する。22～24・35は同時期に琵琶湖沿岸から、25は伊勢湾沿岸から搬入されたとみられる。

36・37は広口壺の頸部である。36は縊れた頸部に、緩やかに外反する口縁部が立ち上がる。内面に粘土接合痕とオサエの指頭圧痕が残る。外面はミガキのうち7本単位の櫛描直線文が5段施文されている。37は大きく外反する口縁部を持つ。頸部に2条の断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。内面はナデ及びオサエ、外面はハケメである。突帯周辺は強いナデである。38は撰津

型水差形土器である。緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁端部は平らに成形され、その一部が低く作られている。内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデ、外面は縦方向のハケメである。器壁は頸部付近が薄く、口縁部で約0.8cmと厚くなる。39～43は壺である。39は緩やかに外反する口縁部である。口縁端部に櫛描波状文を施す。外面には3本単位の櫛描直線文を施す。0.5～0.7cm間隔で平行に施された2段の直線文が1組となり、3組分遺存している。内外面はナデである。40は肩部から頸部に向かって窄まる器形を呈する。外面に上下にやや乱れた5本単位の櫛描直線文を施す。内外面はナデである。41は頸部破片である。頸部外面に8本単位の櫛描直線文が2段遺存している。内面は条痕状のハケメである。42は外面に10本単位で3段の櫛描直線文を施す体部である。内面はハケメである。43は直線的に立ち上がる頸部である。外面に7本単位で2段の櫛描直線文を施す。櫛描文が直線ではない39～41は古い様相を示し、直線文が真っすぐな42・43は新しい段階のものとみられる。44は水差形土器の口縁部である。口縁部が直線的に立ち上がる。口縁端部は平坦に成形されている。内面はナデ、外面は縦方向のハケメのち、4本単位の櫛描直線文を施す。45～47は壺の肩部片とみられる。45は外面に5～6本単位の櫛描直線文と3本単位の波状文が施文されている。内面はナデである。46は外面に3～4本単位の櫛描直線文と波状文を施す。内面は剥離のため調整は不明、外面はミガキである。47はナデ調整した外面に、2本単位の櫛描波状文を5段以上配置する。48は甕口縁部である。丸く張った胴部が頸部で窄まり、口縁部が強く外屈する。口縁端部は上方へ拡張する。口縁端部に刻目を施す。外面上部は簾状のハケメ、外面下部はハケメである。以上の土器の色調は橙色系（7.5YR7/4など）や黄橙色系（10YR7/4など）が多く、灰白色（2.5Y8/1）を呈する46がある。胎土は砂粒が少なく精良なもののほか、38・44・48の様な精良で砂粒が多いものもある。36～48は山城第Ⅲ様式で、弥生時代中期である。

49は壺の口縁部である。口縁端部は上下に拡張し、2個単位の円形浮文が1箇所残存する。口縁端部外面はハケメ、外面はナデである。50は壺の体部上半である。内面はオサエやナデが認められ、粘土紐積み上げ痕跡が残る。外面はハケメ後、櫛描直線文と波状文を交互に施文する。いずれも

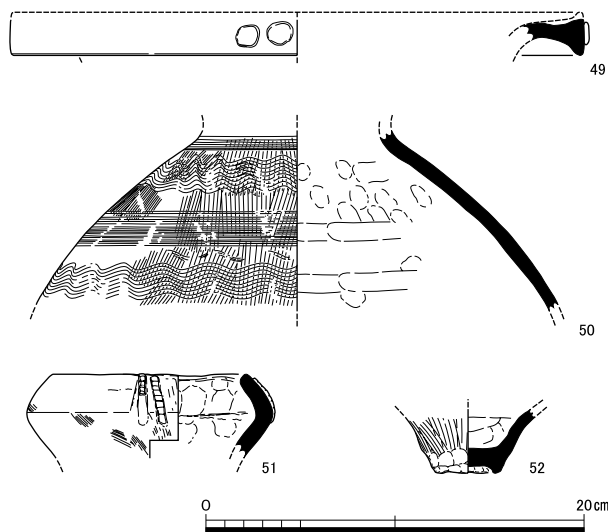


図12 弥生土器実測図3（1：4）

も文様の深さが浅く、所々途切れている。51は細頸壺の口縁部である。細い頸部に「く」字形に内屈する口縁部が付く。口縁部外面に2本1単位の棒状浮文を貼り付け、その上をヘラで等間隔に刻む。浮文貼り付け時の線状の工具痕が器面に残存する。棒状浮文は一部欠損している。内面はオサエとナデ、外面上部はナデまたはミガキ、外面下部はハケメである。52は甕の底部で、底面が窪む。内面はナデ、外面はハケメで、底面近くを指で押さえる。外面に煤が付着している。以上の土器の色調

は黄橙色を呈し、胎土は砂粒が多く粗い52のほかは、精良である。50・51は山城第Ⅳ様式で、49・52は山城第Ⅳ～Ⅴ様式である。弥生時代中期後半から後期前半に位置付けられる。

2) 石器・石製品 (53～63、図13、図版6・7)

53は打製石鏃である。凹基で、側縁を両面からの押圧剥離で調整する。腹面及び背面ともに、原石から取り出した際の剥離痕が残る。安山岩製である。長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ2gを測る。

54～56は磨製石庖丁である。材質は粘板岩で、いずれも半分以上が欠損している。54は長方形型で、側縁が直線的に加工されている。側縁には整形時の加工痕が認められる。刃部は直線片刃に加工され、使用時の擦痕が認められる。穿孔は両面から回転で行われている。縦3.7cm、残存横4.8cm、厚さ0.5cm、重さ17gを測る。55は上部が弧を描くことから、半月形になるとみられる。刃部は幅1cm程度の直線片刃で、面中央には直径0.5cmの穿孔が2箇所を開く。両面に作成時及び使用時の擦痕が多く認められる。上部側面は特に平滑である。縦5.1cm、残存横7.8cm、厚さ0.7cm、重さ43gを測る。56は縦が短く、横に長い形で、杏仁形を呈するとみられる。刃部は弧を描き、両刃である。上部側面は平坦に加工され、擦痕が部分的に認められる。縦3.1cm、残存横8.7cm、厚さ0.6cm、重さ25gを測る。当初は穂摘具として作られたが、上半分が折損したのち、別の用途に転用されたとみられる。

57は粘板岩製の扁平片刃石斧である。上部が欠損しているため、全体の形は不明である。右側面は垂直、左側面はやや弧を描く。全面に加工時の研磨痕が認められ、刃部には使用痕が認められた。刃部は特に平滑に磨かれている。残存長3.7cm、最大幅3.2cm、厚さ0.4cm、重さ8gを測る。

58は柱状片刃石斧である。横断面は長方形を呈する。下端に刃部があり、裏面中央に横方向の浅い抉りが入る。全面が平滑に研磨され、刃部には使用によって付いた擦痕及び刃こぼれが認められる。長さ7.5cm、幅3.2cm、最大厚2.5cm、重さ135.5gを測る。石材は流紋岩とみられる。

59は碧玉製の管玉未製品である。上面中心にある直径0.25cmの孔は、深さ0.15cmまでで止まり、下面には穿孔痕は認められない。側面は中央がやや膨らむが、約16面の面取りがあり、斜め方向の研磨痕が認められる。いずれも成形途中である。長さ2.7cm、最大径0.7cm、重さ2.5gを測る。

60は砥石とみられるが、表面を除く全てが欠損している。表面は細かい線状の傷が多く認められ、刃物傷とみられる。深さが0.1cmを超える使用痕が1箇所あり、その幅は0.3～0.5cmを測る。被熱しており、部分的に暗赤褐色を呈し、黒色化が認められる。材質は泥岩である。残存長9.8cm、残存幅6.5cm、残存高3.9cm、重さ160gを測る。

61は蛤刃石斧である。刃部と基部の一部が欠けているが、基部は当初から平坦に加工されていない。作製時の敲打痕や研磨痕が所々で確認できる。残存長14.5cm、残存最大幅6.7cm、厚さ4.1cm、重さ682.5gを測る。石材は斑状玄武岩とみられる。

62は石英を多く含む砂岩で作られた磨石とみられる。全面は平滑になっており、特に両面中央が滑らかである。縦6.7cm、横5.6cm、厚さ3.1cm、重さ125.5gを測る。

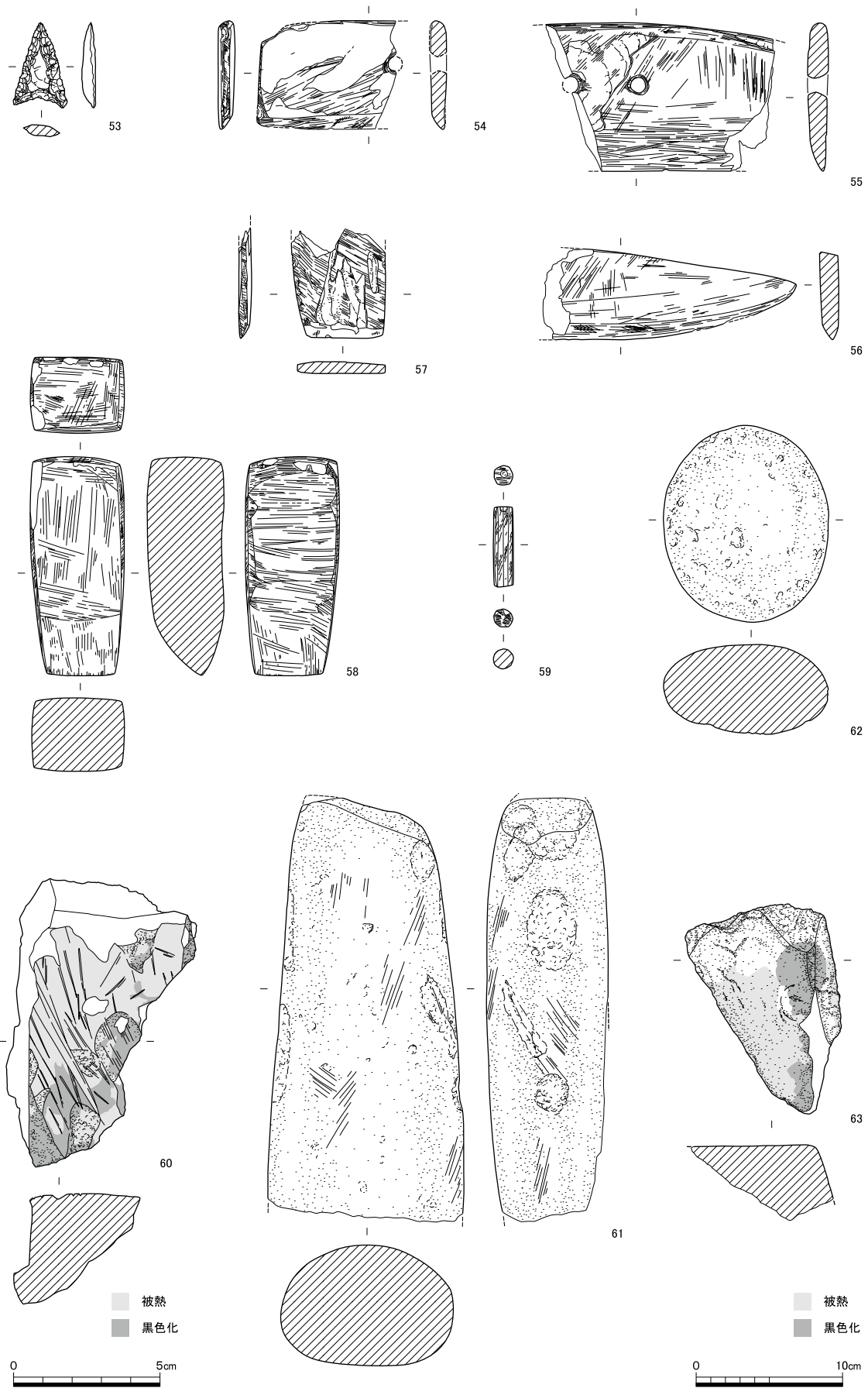


図13 弥生時代の石器・石製品実測図（1：2、63のみ1：4）

63は台石とみられる。半分以上が欠損している。全面が被熱して赤褐色を呈し、部分的に黒色化している。平滑になっている部分に、半円形の沈線状痕跡が認められる。被熱と関係するものの可能性があるが、詳細は不明である。石材は砂岩である。残存長14.3cm、残存幅10.7cm、残存厚5.2cm、重さ593.5gを測る。

58は平安時代の井戸1掘形、それ以外は土坑3から出土した。53・62は弥生時代前期、54～61・63は弥生時代中期と考えられる。

(3) 平安時代以降の遺物

ここには、平安時代前期に造られ、平安時代中期に埋められた井戸1から出土した遺物を掲載した。土器類、漆器、瓦類、金属製品がある。

1) 土器類 (64～77、図14、図版7)

64は土師器杯Nである。器形は緩やかに外方しながら立ち上がり、口縁部外面の強いナデで外反する。口縁端部は直立する。口縁部外面と体部外面は横方向のケズリである。体部外面の所々にオサエの痕跡が残る。口径20.8cm、推定器高4.3cmを測る。65・66は口径14.0～14.2cmの土師器皿Aである。口縁部外面は強いナデにより、外反しながら立ち上がり、さらに端部は上方へ拡張する。67～69は土師器甕である。67は内湾する体部に、外反する口縁部が付く。頸部は強いナデで、口縁端部は内側へ摘み出す。外面はタタキのちナデ、内面はケズリに近いナデを行う。内面に焦げ痕、外面体部に煤が付着する。68は体部が張り、頸部で縊れ、口縁部が大きく外反する。口縁端部内面は玉縁状に肥厚する。体部外面はタタキ、口縁部外面はタタキのちナデ、内面は板状工具を使用したナデ、口縁部内面ハケメである。69は直線的に立ち上がる体部に、大きく外反する口縁部が付く、口縁端部を上方へ摘みあげる。外面はタタキのちナデ、内面は横方向の工具によるナデ痕が残る。頸部外面のナデが特に強い。64・66～68は浅黄橙色(10YR8/4)～にぶい黄橙色(10YR7/4)、65・69は橙色(5YR6/6)から明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

70は須恵器甕の底部である。底部は丸底で中央部が内側に窪む。体部は緩やかに外傾しながら立ち上がる。内面はタタキの充て具痕が波状に連なり、外面は約3.5cm幅の平行タタキ痕が全面に広がる。3mm以下の石英やチャートなどを含む粗い胎土である。71は須恵器甕の口縁部である。肩部で「く」の字に外反する。口縁端部及び外面は、強いナデのため窪む。70・71の色調は灰色(N6/0)を呈する。

72～75は緑釉陶器である。72は口径8.8cmの小椀である。底面は回転糸切りで、釉薬は内外面に塗布されている。口縁端部がわずかに外反する。73は貼り付け高台の椀である。見込みに陰刻花文を配置する。底面は糸切り痕が残る。接地面は摩滅している。底径は6.0cmを測る。74は器高の低い椀である。高台は円盤状に削り出し、底面は糸切り痕が残る。口縁端部が外方へ引き出されている。底面に至る全面に釉薬が施されている。見込み部分と接地面が使用のため、摩滅している。75は口縁端部が強いナデによって外反する椀である。いずれも胎土は精良であり、色調は73・74が

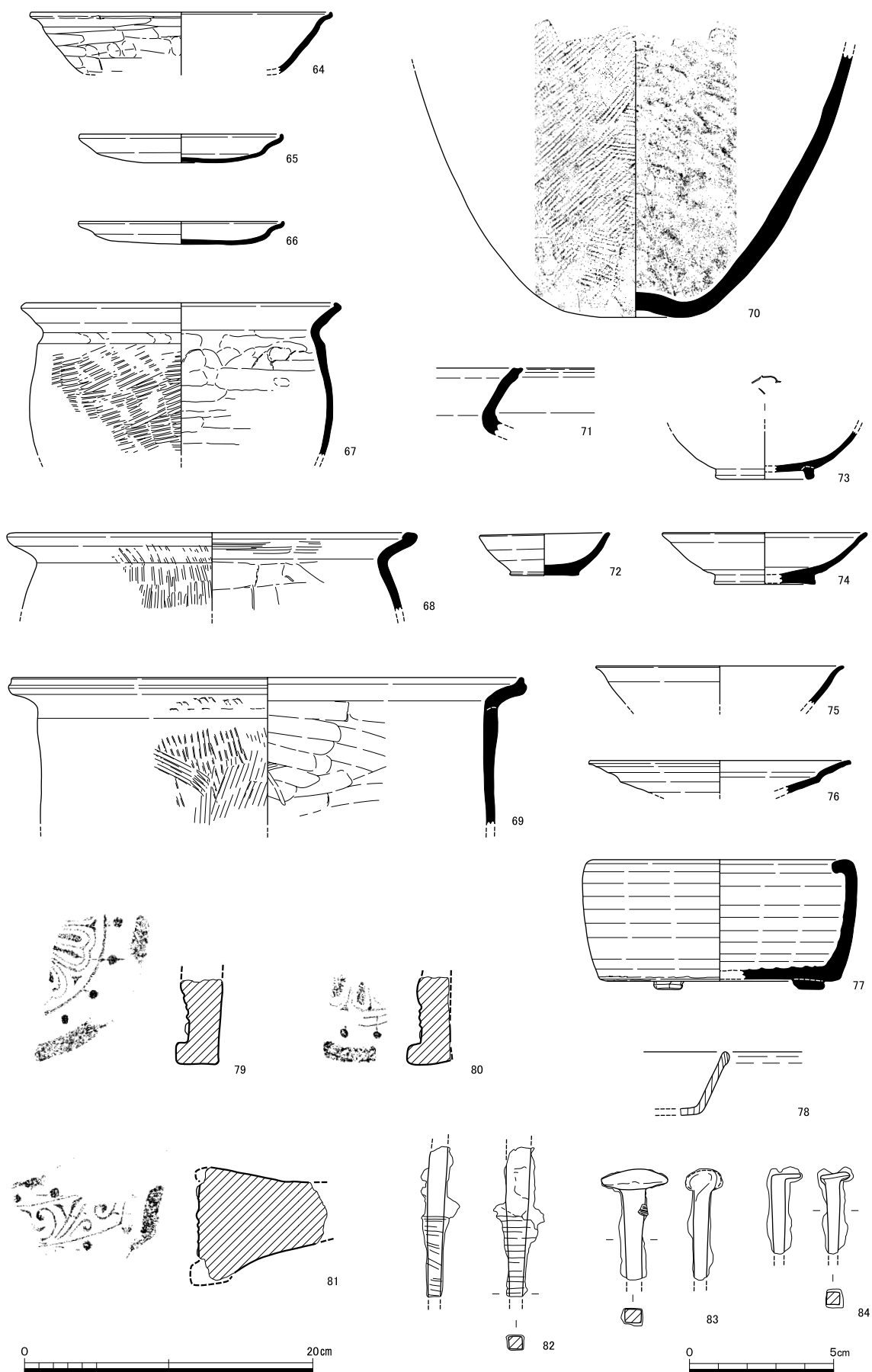


図14 平安時代以降遺物実測図（1：4、78・82～84のみ1：2）

灰色系、72・75が灰黄色系を呈する。釉薬は淡緑色や淡黄緑色の72～74と深緑色の75に分かれる。72の見込みには、0.2～0.5cmの灰黄色や0.05cmの濃緑色の斑点が認められる。73は猿投、74は京都洛西、72・75は京都洛北のそれぞれの窯で焼成されたとみられる。

76は灰釉陶器段皿である。底部から大きく広がりながら立ち上がり、中段から強く外反する。内外面に灰色（7.5Y6/1）の釉薬を塗布する。推定口径18.0cm、推定器高2.8cmを測る。胎土は精良、色調は灰白色（5Y7/1）である。猿投産とみられ、黒笹90号窯型式相当である。

77は瓦質土器火入れである。平面は円形で、浅鉢形を呈する。口径は17.2cm、器高9.0cm、色調は灰色から黒色である。平らな底面に、円形の脚が3箇所が付く。底面からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は内側へ屈曲する。轆轤成形で、内面に凹凸が残る。外面は丁寧なロクロナデ、底面はケズリである。

時期は、64～76が平安京Ⅱ期中段階から新段階（9世紀後半から10世紀前半）と考えられる。平安時代の井戸1埋土から出土した。77は中世以降とみられ、近現代攪乱土除去中に出土した。

2) 漆器（78、図14、図版7）

78は全面に黒漆を塗布する漆器である。器形は平な底面から、やや外側に向かって直線的に立ち上がる。器面の厚さは約0.25cmで、底部から口縁部まで均一である。口縁端部外面が玉縁状に0.05cm程度肥厚する。残存する一辺の長さは約11cm、器高は2.2cmを測る。器の芯となる部分を顕微鏡で観察したところ、網目のような痕跡が遺存していた。型に布をはめて素地とし、上から漆を塗り固める乾漆の技法で作られた可能性が考えられる。残っていた破片の形から推測すると、方形の盆状を呈する折敷の可能性が高い。井戸1埋土から出土した。

3) 瓦類（79～81、図14、図版7）

軒丸瓦は2点、軒平瓦は1点、その他丸瓦・平瓦が出土した。丸瓦・平瓦は凸面に縄目タタキ、凹面に布目を持つものが大半で、平安時代前期瓦の特徴を示すものである。

79は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。割れ面及び剥離面以外は、全面明るい緑釉が塗布されている。複弁間の子葉は三角形を呈し、蓮子圏線まで到達していない。また、複弁外周の輪郭線と接合した子葉が1箇所を確認できる。複弁・子葉の周囲に圏線が巡り、珠文が4個以上配置され、周縁が取り囲む。複弁から珠文にかけて、幅0.1cm程度の範傷、圏線から珠文にかけての範傷が数箇所を確認できる。瓦当下部は横ケズリ、瓦当裏面はナデ調整である。胎土は3mm以下のチャートなどを含み、やや粗い。色調は灰白色を呈する。同範瓦は東寺出土品にあり、同様に緑釉が塗られている。³⁾ また、無釉の同文瓦は東寺⁴⁾だけでなく、西賀茂瓦窯⁵⁾、神泉苑⁶⁾からも出土している。

80は複弁蓮華文軒丸瓦である。複弁は八葉とみられる。花卉は79より幅が広く、短い。周囲を囲む輪郭線は一重である。子葉は圏線に接し、撥形を呈する。これらを囲む圏線は二重で、2個以上の珠文、周縁と続く。二重圏線間と珠文に至る範傷が確認できる。瓦当裏面は剥離が著しい。赤褐色を呈する。部分的に黒色化している。西賀茂瓦窯⁷⁾に同文瓦が出土している。

81は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字文であるが、瓦当中央部分は欠損している。2転する唐草文に、子葉が多く配置されている。圏線及び6個以上の珠文が巡る。左上から右斜め下への木目とみられる範傷が数箇所認められる。曲線顎で、顎部下部は横方向のケズリ、凸面は縦方向のケズリ、瓦当面上部は横方向のナデ、凹面は布目圧痕及び瓦当に近い部分をナデ調整する。布目は1cm²で8×8本の平織である。西寺跡⁸⁾や大山崎瓦窯⁹⁾などで同文の瓦が出土している。

79は井戸1掘形、80・81は井戸埋土から出土した。いずれも平安時代前期である。

4) 金属製品 (82～84、図14)

82～84は鉄釘である。82は残存長5.2cm、上部が0.6×0.9cm、下部が0.4×0.45cmの断面長方形を呈する。頭部及び先端は欠損し、中程から下部に木質が付着している。83は残存長3.85cm、先端部が欠損している。頭部は縦1.2cm、横2.3cm、高さ0.75cmを測る。錆の付着が著しいため、形状は不明である。残存中央部の断面は0.4×0.55cmの長方形を呈する。顎部付近に木質が付着する。84の断面は中央付近で一辺0.4cmの方形となる。頭部は約0.1cmの厚さで一方に折り曲げられている。先端が欠損し、残存長2.8cmを測る。82～84は井戸1埋土から出土しているが、井戸枠には釘が使用されていないため、周辺にあった建築部材などが埋土に紛れ込んだものとみられる。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中	新古中

- 2) 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社 1990年
- 3) 『新東寶記』真言宗総本山東寺 1995年。東寺出土瓦資料No.9。
- 4) 註3の東寺出土瓦資料No.8と同範。
- 5) 『平安京跡調査報告』第4輯 財団法人古代学協会 1978年。第39図の4。N S 152 E 型式。
- 6) 小森俊寛ほか「平安京左京三条一～四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年、原山充志「施釉瓦の成立と展開」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』(『古代の土器研究会 第3回シンポジウム』) 古代の土器研究会 1994年
- 7) 註5の第39図の6。N S 152 B 型式。
- 8) 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年。No.305。
- 9) 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第31集 大山崎町教育委員会 2005年。第13図の17・18。瓦当部右下の珠文間に、「西」銘とその両側に小さい珠文を追刻した18は、註8と同範である。

5. まとめ

今回の調査では、弥生時代及び平安時代の遺構を検出した（図15）。弥生時代は唐橋遺跡、平安時代は西寺関係の遺構とみられる。以下、既往の調査結果を踏まえながら、調査地の様相について述べる。

（1）平安時代の様相

平安時代の遺構は、針小路北築地の中心線上で井戸1、針小路路面中心から北へ約1.5mの位置で溝2を検出した。いずれも平安時代前期から中期初頭に機能していたと考えられる。西寺主要伽藍北方には、花園院や倉垣院などの寺院を維持するための施設があったとされており、それらに関連する井戸や溝と考えられる。針小路の推定地であったが、調査した結果、路面や側溝に相当する遺構は認められなかった。今回の調査地から東へ約200mの西寺境内地（九町跡、図5の30次調査）の調査でも、道路関係の施設は検出できなかったことから、針小路は施工されていなかった可

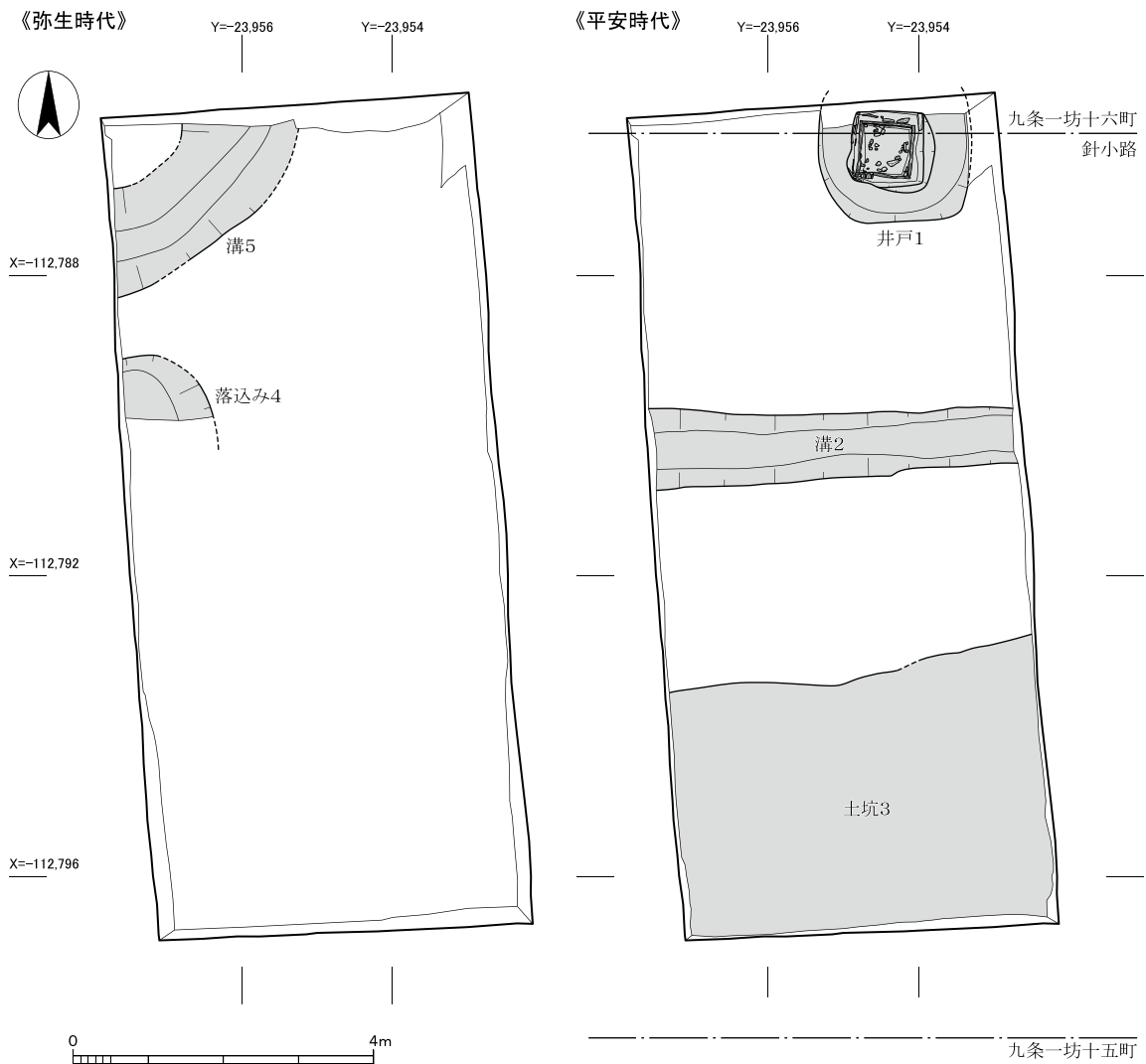


図15 遺構変遷図（1：100）

能性が高いと指摘されていた。西寺敷地内では、『延喜式』の規定通りに、道路は整備されていなかったことを再度確認することができた。

調査区南端で検出した土坑3は、黄褐色の精良な土を採取できたことなどから、西寺造営初段階に建築資材として利用するための土取りを行った痕跡と考えられる。土坑3の東西両端及び南端は、調査区外のため検出できていないが、一辺が5mを超える大きな遺構である。埋土は整地で削った不要な土で丁寧に埋め立てており、いわゆる版築ではないが、固く叩き締めていた。今回検出した平安時代の遺構の中で、最初に土坑3が推定針小路路面上に掘削されたとみられ、西寺に関連する大規模な造成工事の痕跡と現段階では考えている。

西寺境内全域で出土する遺物は、平安京跡から一般的に出土する遺物と変わりのないものが大半である。今回の調査地である十六町跡では、井戸埋土から土師器甕や須恵器甕など調理器具・貯蔵具に相当する遺物が出土している。その一方で、同じ井戸から折敷とみられる盆状の漆器の破片が出土しており、祭具や供膳具などを載せるお盆としての使用例が考えられよう¹⁾。このような使用する行事や場所が限定されていたと考えられる遺物として、12次調査の井戸から二彩陶器壺、16次調査の落込みから三彩陶器皿、23次調査の遺物包含層から越州窯青磁椀や托が出土している。これらの遺物からも、西寺主要伽藍内では特別な供膳具が使用されていたと考えられる。また、25次調査の井戸埋土から土馬、12次調査では井戸最下層埋土から鳥形木製品、同廃絶後埋土から富寿神寶10枚などの祭祀に使用したとみられる道具や、15次調査では緑釉獣脚・円面硯・風字硯など、経典などの執筆を想像させる文房具類が主要伽藍近辺から出土している。修繕や造営関係の遺物では金属製品があり、それらの出土は北半に多い。南半でも鞆羽口などが見つかっているが、伽藍を構成していた建物跡下層であり、造営期間以前のものであることがわかる。明確に分かれてはいないが、西寺敷地南半から出土する遺物と同北半から出土する遺物では、種類や器種、使用方法で一線を画すものであることが見てとれよう。

その他、遺構からみると、西寺境内北半では、役所を想定させる大型建物跡群や倉庫とみられる礎石建物（十町跡）、鞆羽口などが出土した鍛冶工房跡とみられる廃棄土坑（十五町跡）、雑舎のような小規模な建物跡（九町跡）、雑舎に伴っていたとみられる井戸や溝（十六町跡）を検出している。建物の配置や規模、種類から考えても、南半の主要伽藍との違いは明らかである。しかし、これらの遺構の性格については検討の余地は多く、各町にあったとされる施設のそれぞれの役割についても未だに不明な点があり、明確な答えは得られていない。以上から遺構配置のみならず、遺物の出土地点及び出土状況などとの検討を重ねていくことは、施設の役割などを考える有効的な手法の一つと成り得る可能性がある。今後、出土遺物等の比較によって、西寺北側四町域の土地利用を明らかにしていく必要がある。

今回の調査地は中心伽藍から離れた地点に位置しているが、緑釉軒丸瓦が井戸1掘形から出土した。既往の西寺跡の調査では、緑釉軒平瓦や緑釉丸・平瓦などは主要伽藍付近から出土している。今回のように主要伽藍から離れた境内で緑釉瓦が出土した例は、東寺旧境内の調査にもあり、²⁾出土遺構の時期は平安時代中期である。井戸1の時期は、創建当初よりも少し下がった平安時代前

期後半頃に造られたと考えている。使用された場所や建物が限定されていた瓦であることから、これらの時期以降、東西両寺ともに伽藍内の主要な建物修理等が行われ始めたことを表す事例と捉えることができる。遺構の詳細な時期や文献史料との比較検討を更に進める必要があり、今後の課題である。

(2) 弥生時代の様相

弥生時代の様子を知る手がかりとなる遺構として、調査区北東で検出した弥生時代中期の溝5がある。溝5は北東から南西に緩やかに曲がっていることから、方形周溝墓の周溝南東角部分の可能性はある。また、平安時代前期に整地したとみられる土坑3から、弥生時代中期の遺物が多量に出土した。遺物は細片が多かったが、完形に近い土器も少量遺存していた。周辺の調査では、30次調査において弥生時代中期の方形周溝墓2基が確認され、墓域と想定されている。22次調査では古墳時代の竪穴建物8棟が検出されたことも考え合わせると、古墳時代以前の西寺跡北半部には、集落を安定して営めた微高地が広範囲に形成されていたと言える。一方、西寺の主要伽藍が営まれた部分では、弥生時代から古墳時代の流路跡が多く発見されている。これらのことから、竪穴建物と墓域を伴う唐橋遺跡の集落が西寺跡北半を中心とする調査地一帯に広がっていたと考えられる。

今回の調査及び周辺の調査では、弥生時代前期の遺構を検出していないが、当該期の遺物は少量ではあるが出土している。唐橋遺跡は前期段階から営まれた集落遺跡であった可能性が高く、調査の進展とともに検討を行う必要があろう。

註

- 1) 今回の調査で出土した漆器の素地は布とみられる。素材は異なるが、数少ない漆塗折敷の類例として、平安京右京三条三坊十町跡で見つかった木棺墓の木棺内部から出土した一辺約20cmの漆皮折敷がある。材質は皮、時期は10世紀前半である。折敷上に載せられていた遺物の種類等から化粧道具と考えられている。漆塗製品の作成には手間が掛かり、金属製品に次いで高価なものとされていたため、一般に流布していたものではないと考えられており、貴族の持ち物とみられる。非日常的な儀式で使用された事例として、また漆塗折敷の希少性を示唆するため、ここに提示した。『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年。
- 2) 加納敬二『教王護国寺旧境内（東寺旧境内）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年

圖 版



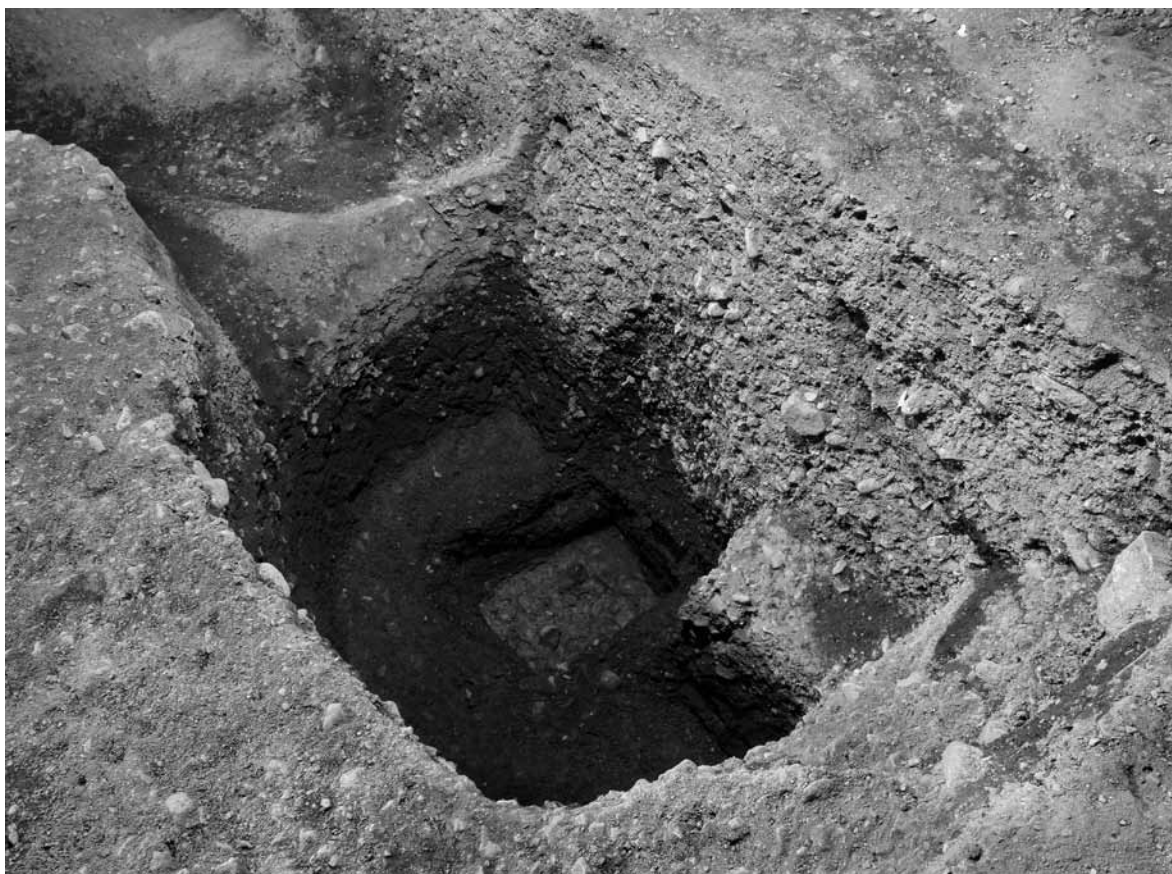
1 調査区全景〔弥生時代〕（北から）



2 溝5全景（北東から）



1 調査区全景〔平安時代〕(北から)



2 井戸1全景(南東から)



1 井戸1 井筒検出状況 (南東から)



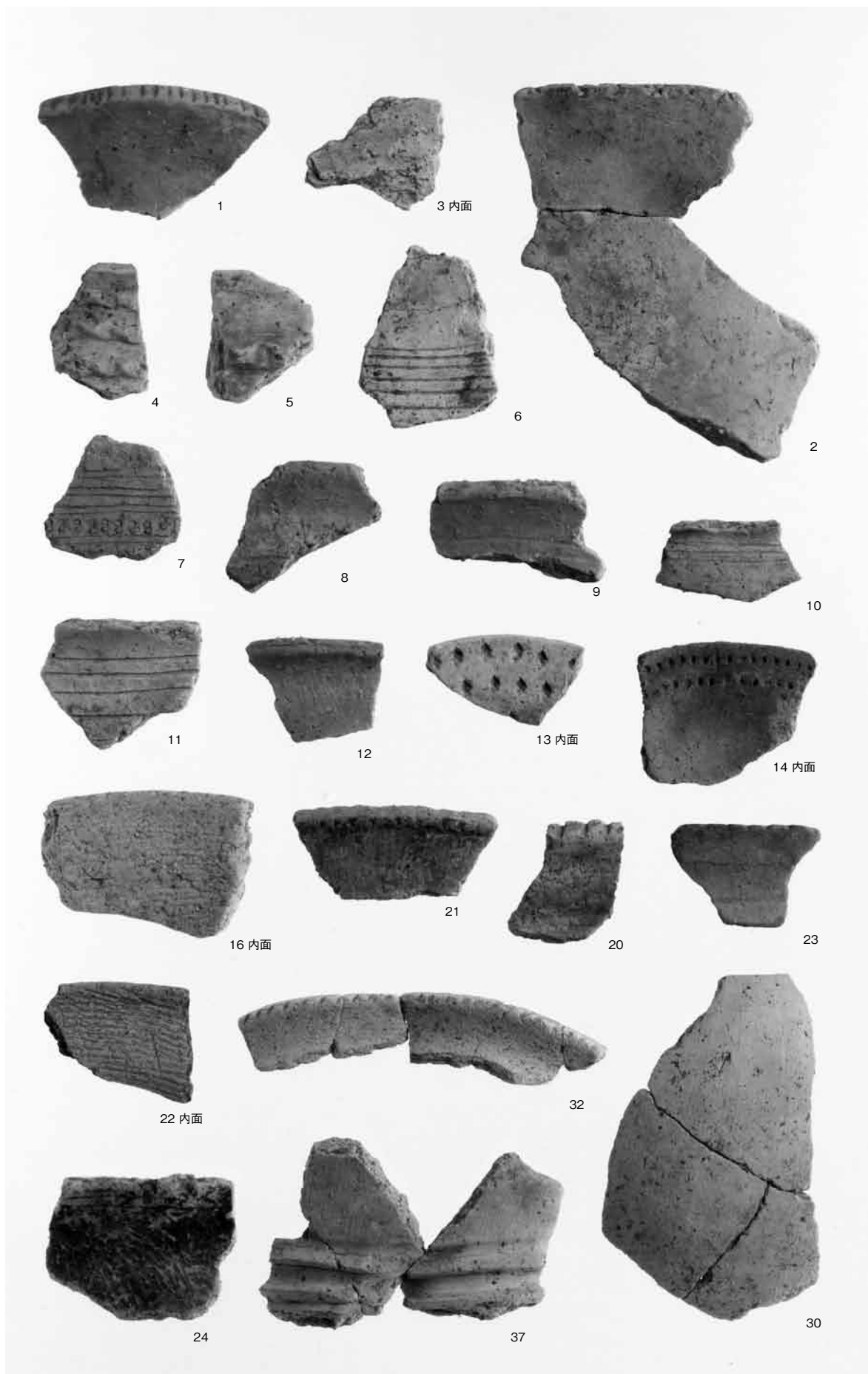
2 井戸1 北西角近景 (南東から)



3 井戸1 北東角近景 (南西から)



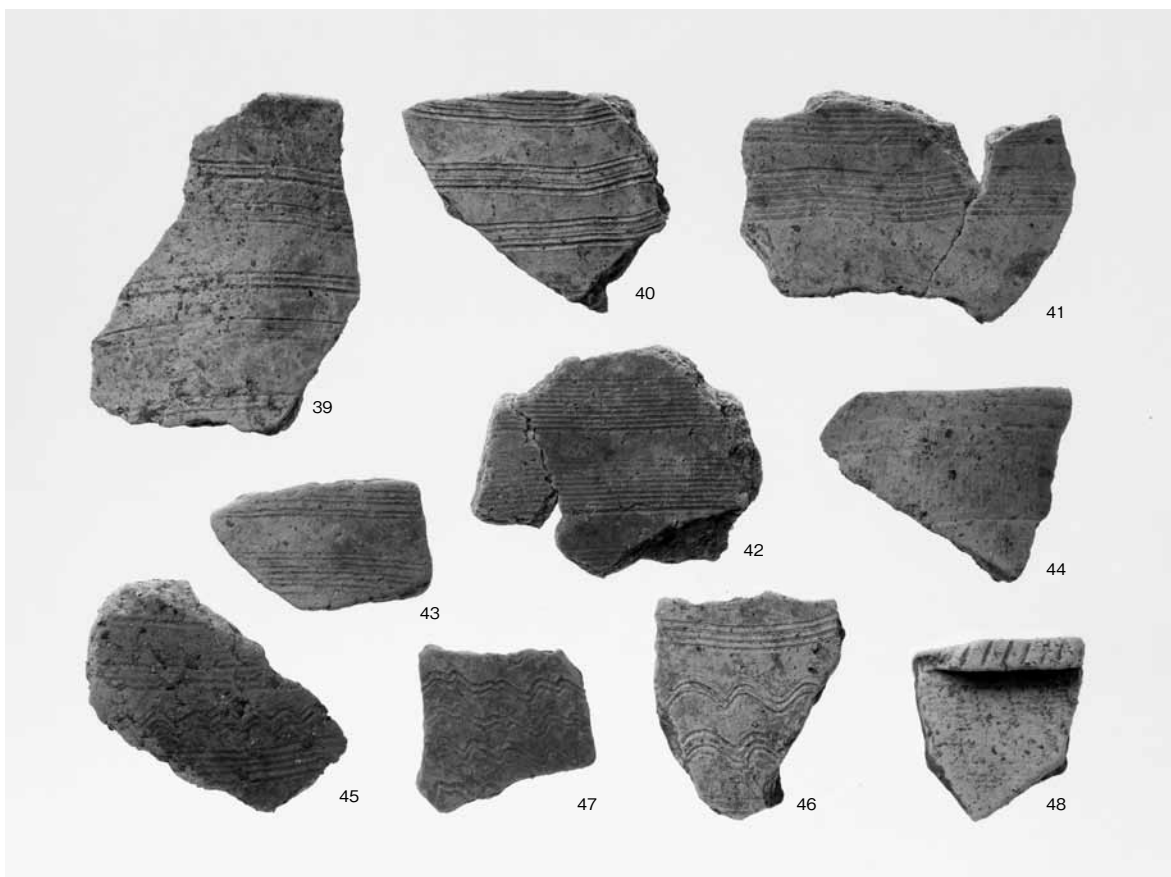
4 土坑3 完掘状況 (南西から)



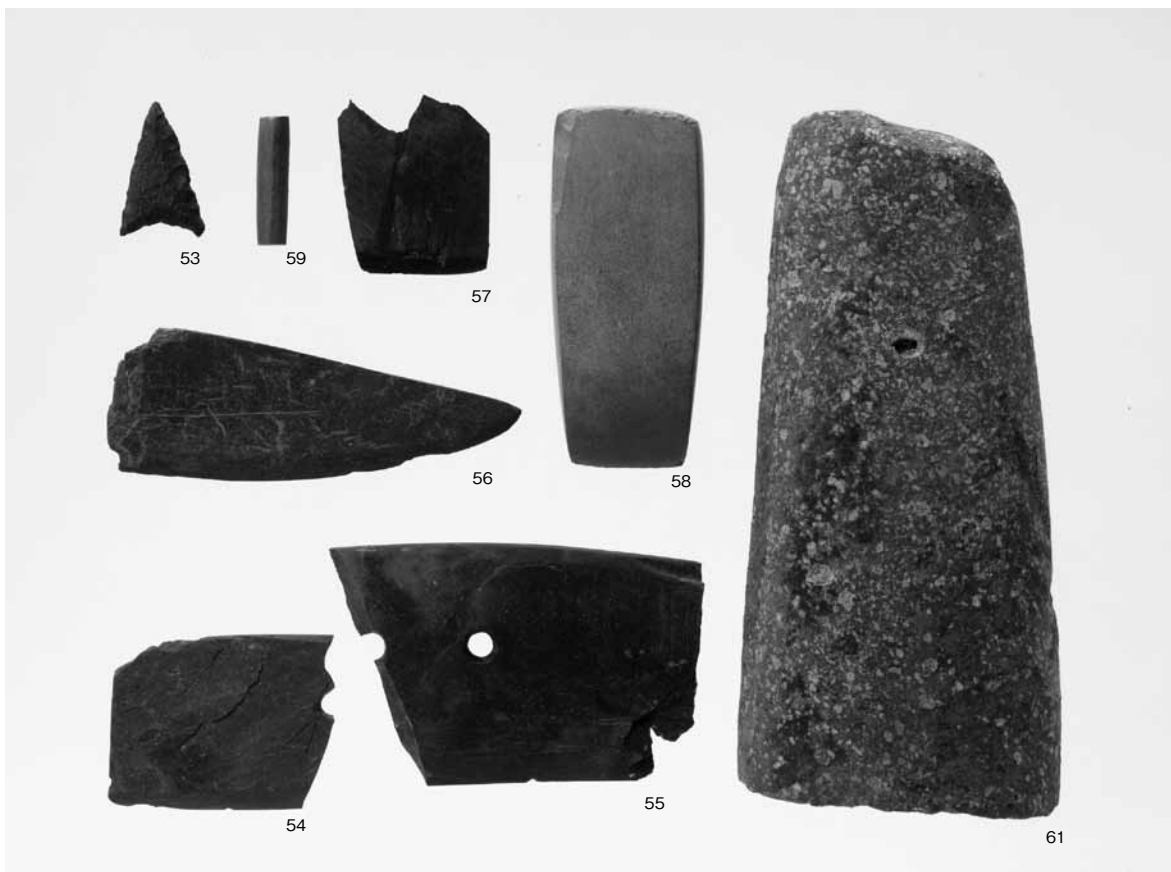
弥生土器 1



弥生土器 2



1 弥生土器 3



2 石器・石製品



報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうくじょういちぼうじゅうご・じゅうろくちょうあと(さいじあと)、からはしいせき							
書名	平安京右京九条一坊十五・十六町跡(西寺跡)、唐橋遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-6							
編著者名	近藤奈央							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしみなみく 京都市南区	26100	1	34度	135度	2016年10月 3日～2016 年10月21日	55m ²	社屋新築 工事
さいじあと 西寺跡	からはしかどわきちょう 唐橋門脇町		755	98分	73分			
からはしいせき 唐橋遺跡	17番地5		756	30秒	76秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	弥生時代中期	溝、落込み	弥生土器、石器・石製品		針小路推定範囲では、路面や側溝などは確認できなかった。検出した平安時代の井戸などは、西寺に関係する遺構とみられる。弥生時代中期を主体とする遺物の出土により、唐橋遺跡の集落が近辺に営まれていたとみられる。		
西寺跡	寺院跡	平安時代前期～中期	井戸、溝、土坑	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、漆器、瓦、金属製品				
唐橋遺跡	集落跡	中世以降		瓦質土器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-6

平安京右京九条一坊十五・十六町跡
(西寺跡)、唐橋遺跡

発行日 2017年1月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961